



標  
花  
語  
抄

四





この巻をかく名つ  
 せしいたる入るし  
 て法成寺造堂をは  
 じめ種々作善の事  
 をりきて年ころあ  
 りつめさせ給へる  
 事どもをきこえさ  
 する小海出品の疑  
 ひぞ出来ぬべき云  
 云と記せるふより  
 てなり  
 世をちりせじめ  
 世をちるといふ物  
 を執るといふ言が  
 世云々とハ撰政た  
 りしるあり

標註 榮花物語抄卷四



小中村義象  
 關根心直  
 標註

⑤ うゑづひ

道長殿の御まへ世をちりはしめさせ給ひてのちみうど  
 一三条三條後一條ハ三代ふたならせ給ふ。わが御よハ廿三四年むうりに  
 ならせ給ふよみうど若うねそしきすときハ攝政と  
 申しねとふびさせ給ふ折ハ関白と申してねはしま  
 すよこのころハ攝政をも御一男たゞいまの頼通内大臣  
 殿に譲りきこえさせ給ひて我御身ハ太政大臣の位  
 きてねはしまねをも常よね不やけよかつし奉らせ  
 給ひ辭せさせ給へどねほやけ更にまこしめしけれ

ぬふたびくわりあくて過ぐさせ給ふ。御心にハさす  
まじうればさるゝ事かぎりなし。かゝる程又御こゝ  
ち例ならずればさるべきバ、人々もゆめさこしく聞  
えさするに、わが御こゝちにもよろしくうらずればし  
めさるればこのたびこそハ限りふめれと物心ほそ  
くねがさる。殿をら宮々などよもいとれそろしうれ  
ぼしなげくふ、いとまことよれどろくしき御心地  
のさまなり。かゝるまじうづにいみじき御祈どもさ  
あぐなり。されどたゞ今ハ志るしみえず。いと苦しう  
せさせ給ふ。さまづの御ものゝけ數へらずのゝける  
中ふげにさもやと聞ゆるもあり。又こゝの外にさも  
あるまじきもの物覚えぬなかりをしあやしきまじ

殿をら宮々  
の子女をいふ殿を  
らハ軒通れ宗うち  
宮々ハ前代當代の  
唐宮たるの方々あ  
り

もをぞ申める。さても心のどかよ世をたもたせ給ひ、  
たらびなき御有様にて、あまこの年を過ぐさせ給へ  
れば、世の人もいとれそろしきことよ申思ひたり。わ  
が御心にもあるべき様にもねがしめされず。心ほそ  
くればさる。わが御世のはじめ六七年ばうりありて  
ぞすべていみじかりし御あやみありて、かう今まで  
れはしますすべくも見えさせたまをざりしうども、い  
みじき御いのりかぎりなき御願の志るしよや。かく  
ておはしませば、このよびもたたらせ給ひなんと  
申え人々もあり。そのだひの御なやまよ、いみじき  
驗者どものありしこそいとたのもしかりしう。なが  
若の觀修僧正、觀音院の僧正餘慶などハ、なべてならざり

ながさみ 長谷  
りこれをまつせと  
川むハ初瀬といふ  
所みあればこ

かみさびたりし  
神の如くおぼえて  
まごくたふときぞ  
いふ

し人々なり。くもんす僧正ハ、やぶて殿の内にはさぶら  
ひ給ひしに、僧都ときこえ候ふを、この御なやみれたこ  
たらせ給へりとしてこそハ、一條院僧正よいなさせ給  
へりし。陰陽師どもハ、晴明みちよ光榮しなどいとかみ  
さびたりし者どもにて、志るしことなりし人々なり。  
所かへさせ給ひきよらかるべきよし申しけしハ、  
故麗景殿の内侍のかみの御いへ土御門よ、わさらせ  
給てれたらせ給にしうべ、その傷をひきて外にわ  
たらせ給へたときさるべき殿ばら申させ給へど、すべ  
て更に生かむとも思ひ侍らばこそあらめとて、まこ  
しめいれぬ。たゞ佛をたのみたてまつらせ給へり。  
年ごろの御ほいたゞ出家せさせ給ひて、この京極殿

やましげ かや  
ましき意なり深氏  
浮舟ふり馬ふてお  
とする心地も物れ  
そろしうやまし  
たれど云々と見え  
たり

のひんがしに御堂たて、そこにたはしまさんうの  
みればされつるを、こたびにこたらせ給へらば、かぎ  
りなき御有様にてこそハ、過ぐさせ給をぬ。さまどい  
かゞとのみ、親しきうときや、ましげふ思ひ申した  
るも、ことごとりに見えさせ給ふ。宮々など皆れはしま  
し集らせ給ひて、さしならびよろづよあつらひたて  
まつらせ給ふ。この世の御ありさまなべくならずめ  
でたうおはしまは、とのにも御修法三壇おこなはせ  
給ひ、さまぐの御讀經かずをつくさせたまへり。内春後朱雀  
宮上東より姪子も大宮皇太后宮中威子宮小一條院又攝政殿教通左大  
將殿などみな御修法せさせ給ふ程の御有様思ひや  
るべし。殿のうちいさらにもいえず。そのわたりの人

のいへくたほきなるちひさきわかず、こゝらの僧ども  
もいりぬたり。かゝらんはいりてかと思えさせ給  
ふ。御祭被ふごいはんかたなし。殿の御まへいりて今  
いのりのせでたゞ滅罪生善の法どもを行をせ。念  
佛のこゑをたえずきかばやとの給をすまご、それハ  
つゆ此殿頼通等ばらきこしめいれず。いかでとくほいと  
げてんと上東の給はするを大宮きこしめして、猶今志ば  
し後朱雀春宮の御よをまたせ給ふべくきこえさせ給ふを  
心うくあひだほしめさぬ也けり。と恨申させ給へば、  
いりにくとのみ思しなげかせ給ふ。御ものゝけども  
いとねどろくしうゆしくいふも、傍の事なれど、猶  
いりよとねほやけわたくしの大子唯今これよりほ

内東宮たす云々内と後一条院を  
申し東宮ハ後朱雀  
院と申すとも彰  
子の出なり三とこ  
ろの后ハ彰子姫子  
威子ふて院の女内  
ハ政子といふ皆た  
出の女なり、此外の  
公達の官位ハ左ハ  
太郎頼通 正二位  
次郎頼宗 正二位  
権中納左衛  
門督使 正二位  
三郎教通 正三位

かよなるるかはと見えさり。仁和寺の僧齊信正なども皆  
ねます。との、御前さらふいのちをしうも侍らず。さ  
きぐ世をしりまつりごち給へる人々ねほかる中、  
おのまばりりさるべき事どもあるため、いなく  
なんある。内東宮ねはします。三所小一条のまさき、院院の女御  
ねはす。たゞいま内大臣にて攝政つかうまつる。次ハ  
大納言にて左大納言かけたり。又大納言あるハ左衛門  
督にて別當かけたり。この長家をこの位ぞまだいとあ  
さけきご、三位中将にてまぐり。皆これつきくねほや  
けの御うしろ見つううまつるべし。みづらら大政大  
后准三后のくらゐにて侍り。この廿餘年のほど、なら  
ぶ人なく身ひとつふして、あまの御門の御後見を

権中納言左  
大将正二位  
四郎能信世  
権中納言中  
二位  
官権大夫正  
五郎顯信出家  
六郎長家十四才  
右近權中將  
正三位下  
冷三宮 上小注せ  
り  
あまのの帝の正後  
見 一條三條後一  
條の三朝ふ撰政た  
りき  
五人太政大臣とか  
り 伊弉兼通兼家  
為光の四人ハ太政  
大臣ふなり公季ハ  
右大臣ふてやみふ  
き

つうりまつるよ、ことなるなんなくてすぎ侍りぬ。お  
のが先祖の貞信公いミトウねはしたる人、我太政大  
臣よて、太郎小野宮実頼の左大臣、二郎九條師輔右大臣、四郎五  
郎こそハ大納言などにて、さしたらび給へりけきと、  
后たち給へずなりにけり。あかうハ九條の師輔と、わ  
が御身ハ右大臣ふてやみ給ひにけれど、たほ后安子の御  
をらの冷泉院、圓融院、さしつゞきねをしまし、十一人  
のをのこ子此中、五人太政大臣ふなり給へり。今ふ  
いみトき御さいはひなりかし。さきと后三ところか  
くたち給へるためしハ、この國にハまたなき事也。あ  
どふにめでたき御有様をいひつゞけさせ給ふ。こと  
し五十四なり。死ぬとも更よをぢあるまじし。今ゆくす

ろらふく風 後撰  
葉雜四小均子内親

急もかばうりの事ハありがごとくやあらむ。只あのおぬ  
りハ、嬪子内侍のかみを東宮ふたてまつり、妍子白太后宮の一  
品宮陽明門院の御有様、このふたことをせずなりぬることあ  
れど、大宮上東ねをしまし、賴通攝政のれとゞいます。がれば、さ  
りとも志たまふ事ありなんといひつゞけさせ給ふ  
ふ宮々殿むらなうせ給ふ。僧俗なみだとゞめがたし。  
倫子うへハ更にもいえず。きこえさせんうたなし。かくて  
今ハとして院源僧都めして、御ぐしねろさせ給ふに、う  
へも年ごろの御ほいなれば、やがてとおぼしの給を  
すきと、嬪子かんのとの御ことの後よと、申させ給へば、  
いとくちをーと思しまどふもいみじ。  
かくて世をそむうせ給へきと、御いそぎハうら吹風

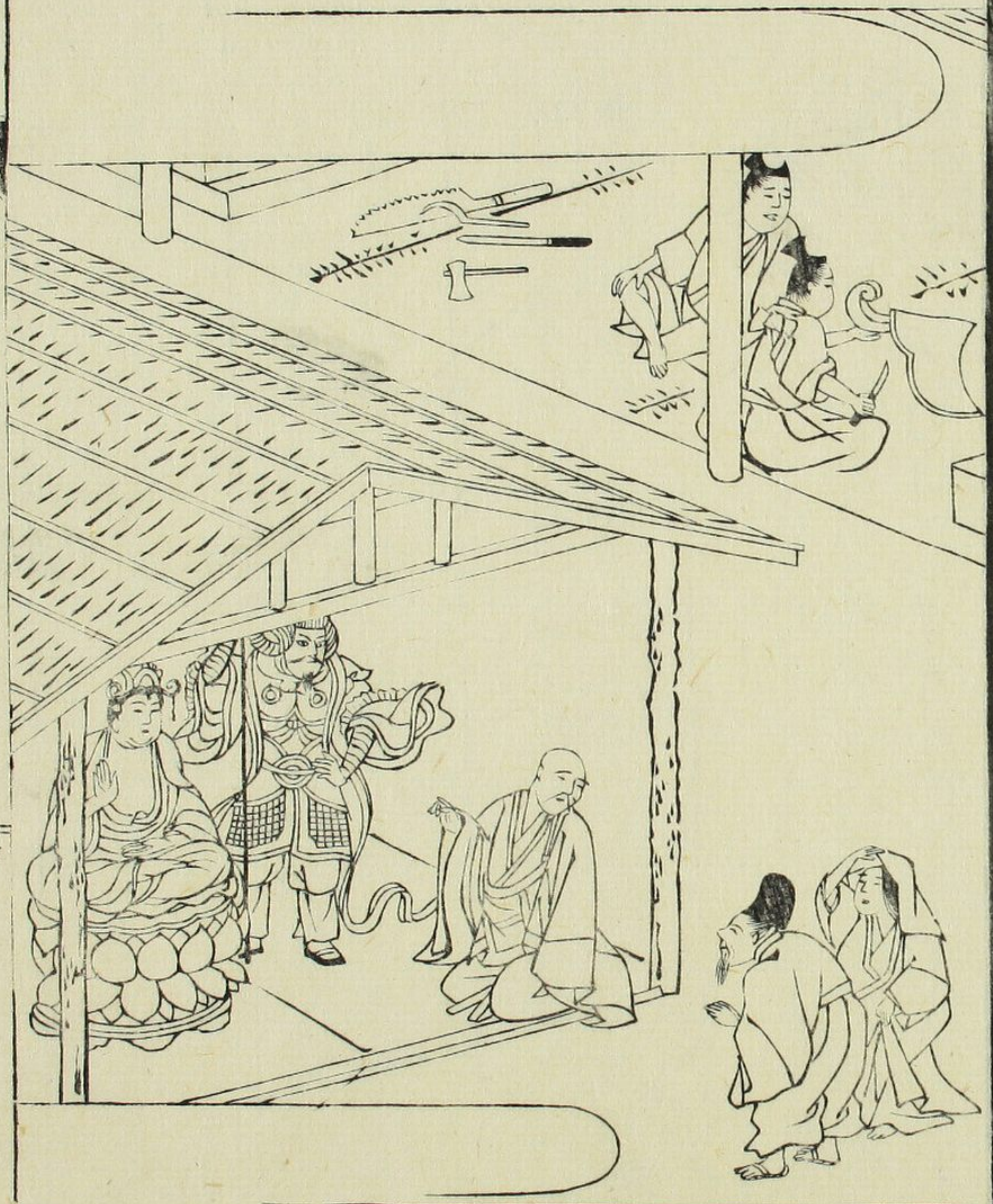
これと思ふ人も  
可守るたありそあ  
のうらま風のやむ  
時もた々

ふや。いまハ御心ちれいざまふなりはてさせ給ぬれ  
バ、みだうのり思しいそがせ給ふ。摂政どの國々まで  
さるべきれほやけごとをばさる物にてまづこの御  
堂のことをさまとつうらまつるべきれほせりのた  
まひ給ふ。殿の御まへも、このたび生きたるハことく  
ならず。わが願のかたふべきなめりとの給はせて、こ  
とくなくたゞ御堂にねをします。方四丁をこめてね  
ほがきににして、かたらふきたり。さまあぐふれほしおき  
ていそがせ給へバ、ねのあくるも心もとなく、日のく  
るゝもくちをしうればされて夜もすがらハやまを  
たゝむべきやう池をはるべきさまうゑ本を植ゑお  
めさせ、さるべき御堂々かたぐさまあぐつくりつゞけ

北北内莊 北北と  
いお戸のりなり既  
おせり北北内莊  
園として私有の田園  
地あり

ちし 公田を小作  
する者の年貢の類  
を地子といふあり  
委しくハ延喜式江

御佛ハなべてのさままふやハれをします。丈六の金色  
佛を敷もたらげ造りなべ、そなたをバ北南とめだう  
をあけて、なをととのへ、廊わたどの敷多くつくらせ  
給ふ。鳥のたぐも久しくればされふひ曉の御行ひ  
も急らず、やすきいも御とのごもらず。たゞこの御堂  
のりきをのみ深く御心よたませ給へり。日々に多くの  
人々まゐりまかでたちこむ。さるべき殿ばらをはじ  
めたてまつりて、宮々の御封御莊どもより、一日お五  
六百千人の夫どもを奉るおも、人のかずればゆる  
るをば、うゝこきことよおぼしたち、國々のかみども、  
ちし官物ハれそなはれども、只今ハ此御堂の夫役材  
木檜皮瓦など、ねほく参らすることを、我もくときや





家次第等ふんゆ

ひつらうまつる。たほりた近きも遠きもまゐりこみて、志なぐかぶぐあたりくふつらうまつる。ある所をみまば、御佛つかうまつるとして、佛師ども百人をりりなみるてつかうまつる。同じくこれこそめでたけきとみゆ。御堂のうへを見あざれば、たくみども二三百人のぼりゐて、大きな木ともふいふとき綱をつけて、こゑをあはせ、くたえさと引きあげさる。御堂の内をみまば、佛の御座づくりかゞやうす。板敷を見まば、とくさむくの葉も、のさねなどして、四五十人が手ごごよなまゐてみまきのごふ。ひはだふき壁ぬり、瓦つくりなど、うずをつくしたり。又とて、いたる翁法師あどの、三尺ばかりの石を、心にまかせてき

とくさむくのそとくさ木賊とらきて草あつむくハ木ふて標かく共小物をすりまぐく小用ふ桃のこねも

ちうららるる人のかしてひく者等のあつて馬鹿の四は廣河女王

須達長者の祇園精舎つくりけん天竺の富人須達多といふありたり佛

りとのふるもあり。池をほるとして、四五百人たうりたち、山をたゝむとて、五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、ちうら車にえもいをぬれば、木どもに、綱をつつけて、さけびのり、志り、ひきもてのぼる。かも川の方を見れば、いりだといふ物に、くれ材木をいれて、さをさして、心ちよげにうたひのり、志りて、もてのぼる。めり。大津梅津の心ちするも、にしハひんがしといふ。みハこれなりなりとみゆ。磐石といふばかりの石を、そらなき筏よのせて、ゐて来れど、志づまず。總べていろく様々、いひ盡し、まねびやるべきうとなし。かの須達長者の祇園精舎つくりけんも、かくやありけん。と見ゆるを、冬のむろなつの風、おのく事とたす。つゝる

法改依て釈迦の  
ためふ説法の場と  
寄附せんとて祇園  
とつた野ふいかめ  
しく精舎してた  
る賢愚因縁経北  
本堂繁経等ふんえ  
たりと云々引る  
む精舎とい寺の事  
あり  
冬のむろゑの風  
佛本行集經十二  
楠術争婚品ふ云  
く尔時太子漸向長  
成至年十九時淨飯  
王為於太子造三時  
殿一者暖殿は擬隆  
冬第二涼殿擬春暑  
其三殿擬春秋二時  
寢息云々釈迦如來  
太子たりし時榮曜  
の状をいへるこ  
れふよりりりり

御いきほひにそへて、入道せさせ給ひてのちハ、いと  
どまさらせ給つりとみえさせ給ふにもなほあべて  
たすらざりける御有様かたと、近う見たてまつる人ハ  
たふとみ、遠う見奉る人ハはるうにをがみまゐらす。  
今ハこの御堂のあさりの本草ともならんと思へる  
人のこねほり。そなたさまに趣けば、海の浪もやは  
らうにたちて、御堂のものをもてをこせ、河も水す  
みて、心よくうらべもて参ると見ゆ。猶この世のこと  
とハみえさせたまはば、まづハせんねんに長谷寺ハ  
ある僧の御いのりをいみじうして、寐たりける爰又  
たほきにいめしきをこのいできて、なにより  
殿の御事をバともかくも申給ふ。弘法大師の佛法こ

此巻をくく名つた  
けこるハ巻首小  
一条院の女御失せ  
給へることあり院  
きこーめして神  
をおいてた  
せ給へるあり涙  
のもしむるむも  
との栗やと哀あり  
とかける個ふよれ  
り  
ゆてさせ給ひ發  
汗散熱せんためふ  
脚湯するすん

うりうのため、にうまれ給へるなりとぞ見えさせ給  
ひける。又天王寺の聖徳太子の御日記にハ、王城より  
ひんがしに、佛法ひろめん人をバ、われと忘れとこそ  
ハ、かきれかせ給ふなれ。いづりたよてもれろりなら  
ぬ御事なり。  
⑤とやの栗  
寛仁三年四月むりふ、堀河の女御<sup>延子</sup>あけくれ涙に志  
づみて、れをしませバにやれをしけん。御心ちもうき  
あつらもたほされて、傷ならぬさまにてありすぐさ  
せ給ふほどに、いとやまーうたほされけきバ、御風  
にやとて、ゆでさせ給ひてのぼらせ給ふまゝ、又御く  
ちはなより血あえて、やがてきえいり給ひぬ。<sup>頭光</sup>ねと

清く急をさゝげてなきの、あり給へど、何のかひう  
あらん。七十餘ふなりぬるれのれをめせ。若くさか  
かる人のり未遙うなるをばうし給へど、おきの  
せ給へど、うくる乃ハすぢなきわごありや、色づえとめ  
奉らせ給はずありぬ。いとあさましうて、なてさせ給ひ  
ぬれば、院小きこしめして、急ぎ渡らせ給へれど、今ハかくと  
きこしめして、御顔ふひとへの御袖をおしあて、たせ  
給へるより、涙のつゞくともりいでたるほど、もとれ  
志づくやと、あされおろろあらず。今ハ昇らせ給ひて  
も、ひたゆるべけま、つちにたせ給ひて、宮々抱き出奉  
らせ給ひて、一宮教貞の御めのとのをとこ左近太夫致行をめし  
て、殿はたおればえさせ給はざり。この宮々かの東の對

もとの志づく、秋  
古今集哀傷の部  
おぼ正通昭  
未の露もあ  
やせの中のおくれ  
先立つしめしふる  
らん

にわさしたてまつき。あなかしこふるひるち、かくて  
みたてまつれなどが、あぐねせられおき給ひて、  
いまいふかひなければ、今又こむ。殿頭光もえたいめ  
んせずなりぬる事とていでさせ給ひぬ。源宰相頼定ハ此  
取元子りかくの、志れば、をらなきものをだよりあへ  
で、女御元子もろとも外へわさり給ひにけり。一教貞のみやの  
いみじうなき給ひつるも、あはれおれもほされて、い  
くばくもあらざりける御ありさまを、などてつらし  
と、覺えたてまつりつらむと、年ごろのほいなく、あは  
れなるわざかなと、たばさまでやがて志ものみやに  
わたらせ給ひて、かうくのりなん侍る。あはまにいみ  
じき、このをさなき人々いかに侍らんずらん。た

いくさくもあら  
ざりたる云々  
織らもふまき、命を  
しまり、あんなこと  
まつり、え思えれ  
りといふ、同じ大  
意、かく承かるま  
ト、き契りある、小何  
とてつらしめをえ  
せ、らんとなり、た  
の女がり、恒み、女  
ふつれ、あく、こしつ

るすよふんえたり

頭光

いまいあくならせぬらんいとふりくなるさま  
にこそき、侍りつれなどよろづあまれの給ひ續  
けてなうせ給ふ殿ははせぬ人をつといだきてよ  
ろづにいひつゞけなうせ給ふもいみどら悲し。か  
るれもひにや人の法師にもなるらんと給はする  
を御前なる人々心のうちには、忍まれけり。源宰相  
いと心ぐるしき殿の御有様をみすてたてまつり  
給ふも、ことのをとめいとなさけなうりし御心のあ  
まれ給はぬなりや。

こののをとめ云々  
れ定九子不通ひし  
を元子の又頭光不  
満と思ひしすこれ  
もよふんえたり

その年の七月に臨時のつかさめありて、この殿を  
らの御有様みなりもてゆく。としごろハ左大臣  
にてハこの堀河のねと頭光右大臣ハ閑院のねと公季内

大臣にてハ閑白頼通どのぞれはしましつるを、左大臣に  
ハ閑白殿、右大臣ハ小野宮実資右大臣内大臣ハ大殿  
の大將教通太政大臣ハ閑院のねと公季ならせ給ひぬ。ハ  
九月もなりぬまば、本々のこの葉も枝ふともよらぬ。  
虫のこゑく物たもひ志りがほに、萩ふく風の音もそ  
ぞろさむく、旅ねのかりのたよりあげあるこゑも、み  
みふとまりて、奥山の鹿もいとどいやめよ思ひやら  
れ、よろづあはれふ物心ぼそきたぐれ、皇太后宮妍子の女  
房達をしふうちなうめて、たのがどちうちかよらふ。  
あはれかくもかあき世に、罪をのみつくりてまぐす  
ハ、いみどまわざあふ。いざたまへ。さるべき君達もろ  
ともふちぎりて、經一品つゞりきて申しあげんとい

秋ゆく風の云々  
万葉集四ふ  
神風のいぜの濱  
をきおふせて旅ね  
やまらんあらき濱  
べよ  
同集十一  
り一なる秋の  
さやき秋風の味  
るかふふ雁なきこ  
さるかとある秋の  
さよらや  
いやめ、うれひ秋  
あるめもをいふ

結縁 けちえんと  
ハ浄土へ行かんと  
て佛ふちたるみまを  
結ぶ音あり  
五の四方 為光の  
女なり次なるはく  
しげ殿ハ野光の弟  
正光の女ふて共よ  
宮の女房あり

ひて、いとよき事なりとかたらひあはせて、御前より系  
りて、うらぐの身をたんとつらまつらんとおもひさ  
ぶらふ。いかゞと啓すまば、いとよきことなり。さらば  
まめやうよしいでよ。など仰せられて、さるべき人々  
卅人むかり結縁すべし。まづ法花經の序品ハ、五に御  
かたとさだめさせ給ひて、方便品ハ土御門の御匣殿  
などの給をせつゝ、いまハ一定にありて、たのしいか  
がせましむるとき、にくきまで思ひささるゝをとも  
たる人々もともめをうぐ志からぬハ、いうよせんと思  
ひ、まいてさらぬ人ハ、たゞ思ひなげきて、さるべきと  
のをら君たちちども皆とりぐに志給ふべし。只今ハ  
かやうの功德の事といれば、えで、おのくいとみわざ

そのれう 元照の  
布施物とすべき料  
なり

のやうみて、ちやく罪つくりふ見えさり。かくさわ  
ぐ程に、十日になりぬれば、九月の廿日の程なり。經  
のはこハ御前ふまうけさせ給ふ。さていうならんと  
思ふ程に、皆志いでたてまつりつれば、れなむじうハ此  
月のうちといそがせ給ふ。講師よい<sup>永</sup>えい<sup>照</sup>せう律師と  
心ざし思へり。そのれうハ綾うすもの、とのるさう  
ぞく一くだり、さてはきぬ百むりぞありける。今ハ  
いづくにてうと定めらるゝ程、殿まゐらせ給へれ  
む、宮の御ものがさりのついでに、<sup>妍子詞</sup>ふ侍る人々の  
かうくの事を志出で、いづくにてうとなん申める。  
ときこそえさせ給へば、<sup>道長詞</sup>いふや御堂よりほりよてハ、い  
づこにてうつかうまつらんと申させ給へば、さはさ

にこそはと定めさせ給ひて、道長詞さてもかうしにハ准を  
をとか申す講師のれうにハ何をうまうけてさぶら  
ふと申させ給へバ、講師ふを永えいせうとぞおもひて  
をべる。それいとよきことに侍るなり。いかゞまうけ  
たるとの給ハ業速妻まをハ内侍のすけさぶらひて、おやう  
を物のよるの装束ひとくんだり、きぬ百をうりなむさ  
ぶらふめると申せば、いとまうなることふこそあな  
れ。猶ハ五十を講師にハとらせて、のこりハ題名僧ど  
もふこそとらせめ。さてもいつかとの給をすまひ、け  
ふあすの程にとなんときこそえさすきバ、あさて佛二  
いとよき日あり。さらバ御堂かいはうせ、老法師の居  
所もかきはらそせ侍らん。若れもとたちの物わらひ

いともうかること  
もうそ猛の字音  
あて執き強きまの  
洞なり俗ふえらし  
なぶといそん程あり

莊嚴 志やうごん  
とハ飾りいかめし  
くすること

し給ふことをづかしとの給はせて、いそぎかへらせ  
給ひぬ。御堂ふねはしましてかうくのうあり。阿彌陀  
堂ふ莊嚴し、その南の廊ふは女房のゐどころさるべ  
うし志たしき上達部あともをん。その目のまゐり物  
御厨子所わざみすべし。女房のくひ物くだ物などを  
べしとの給をせていそがせ給ふ。宮の女房殿の御ま  
へのきこゝめしつることとをいとまづかしくいりに  
いりよと思ひさきぎたるなともいそと見えたり。  
阿彌陀堂ふ莊嚴いみとらせさせ給へり。殿その目の  
つとめて、宮に参らせ給れハ、經おのくいまぞめて奉  
つりあへる。經の御有さまえもいそずめでたし。ある  
ハ紺青を地ふして金のでいそきたまふ、金泥の

涌出品 涌出品  
量品授婆品ハ皆法  
花經廿八品のうち  
也

恒沙の井云々 恒  
沙といハ竺なる恒  
河の沙といハ義不  
て数多き由を喻へ  
いへり井ハ菩薩の  
略体なり

常在靈鷲山 釈  
迦如来在世の時多  
く此山に居て度く  
妙法を説けりとい  
ふ大唐西域記一  
尺云く靈鷲山  
といハ名のりも同  
書ハ鷲鳥棲むお  
依て然云へる由お  
れと智度論ハ嶺  
鷲山といハ故ハ鷲  
頭山といへる由

經あり。あるハ綾のもんふちと繪をし、經のかみしも  
小繪をかき、又經のうちのみどもをかきあらはし、涌  
出品の恒沙の井の涌出し、壽量品の常在靈鷲山の有  
さますべていふべきにあらざ、授婆品はの龍王の  
家のかさをかきあらはし、あるハ志ろがねこらねの  
ふだをつけ、いひつゞけまねびやるべきかともなし。  
經といハ見えたまはず、さるべきもの集などをかきた  
らんやうにみえて、このまゝうめでたう志ろり。玉の  
軸をし、たほかごと七寶をもてかざれり。まだかうめで  
たきみみず。經をこの紫檀をもていろくの玉をあや  
のもんに入れて、こがねのすぢをおきくちにせさせ  
給へり。からの紺地のふしきのこもんなるをきとて

を記せり  
かの藤王の家の方  
云々 この經文中  
ふハ八歳の龍女の  
南方無垢の地ふい  
ねる由を記せりそ  
れが家の有様あり

にせさせ給へり。あなめでた、たおしくハかやうにし  
てこそ、持經にあつてまらめと見えたり。殿のいふ  
かへもぐ感ぜさせ給ひて、經藏ふをさめ奉らんと  
給をせて、ぐしてたはしまゝぬ。女房とくくまゐるべ  
しとのたまをせけま、官司の車ども四五めして、五  
の御方をはじめたてまつり、卅人の女房のりこぼさ  
御堂へまゐる。かゝりけるはれの子に、さるべき用意  
あるべかりけるものをとねもへど、ありのまゝのす  
がごどもにてまゐる。このころの扇を色くいとど  
あとりつるなりどもなれば、ことさらにかうこそは  
と見えそ、みだれ乗りて参りぬ。あみだ堂の南の廊に  
たろさせ給ひ、上達部ハ東のすのこ、かうらんじう

しろをあてつゝなみるさせ給へり。殿の御まへかう  
かうのみのありつれどいざや、さばりぞあらんと  
思侍りつるに、あさましう目も及まらずこそ見給へつ  
まなごといみじうけうじの給もすれば、この殿ばらも  
いみどろ感ぜさせ給ふ。女房の中ふをうきさまに  
て菓物などいれさせ給ふ。殿ごらも物あどきこしめ  
す。宮司頼よりたふ任これ惟より頼為政など、女房のりとりれ  
こなふ。講師のまへ題名僧のりなどいみぢ宮よりも  
きのふつううまつれり。ことごとくもあたまをうきつて、めで  
講師参りたり。赤色の装束いどうるをうきつて、めで  
たうてまゐり、香爐もたげて佛をがみたてまつるほ  
ど、いかなるをいひいでんとすらんと見えたり。高

かいひやく 開白  
と書く佛の前ふて  
を式言と稱して何  
子と申すもまづ  
敬て何々佛ふ白す  
と唱ふるを別とす  
之を開白ともいへ  
るなり  
大意釈名云々  
ま  
づ極文の大意を釈  
し次み名義を釈し  
それより本文ふ入  
りて解説をなすこ  
れ況教上の定式か  
り

座にのぼりてかいひやくうちして、事のねもむき申  
して、願文すこしうちよみて、ことのありさま經のう  
ちの心をへ、れいの大意釋名入文解釋よりをじめて、  
いみどろ聞きよくめづらういひもてゆくに、殿の  
れまへをははづめたてまつりいみじう感ぜさせ給ふ。  
無量義經より志て普賢經にいたるまで、ときつゞけ  
たるほど、女房の面目をきはめ、宮の御ありさまめで  
さし佛在世の時善提心をたこすもの千万人ありし  
かど、いまだあらじ。女の身にちぎりをむすびごと  
をかたらひて、かく善提心をたこして事難解難入の  
法花經を書寫供養し、七寶をもてかざりたてまつる  
り。これ希有の中の希有の事をり。法花經書寫供養の



切利天 譯してハ  
三十三天と稱す六  
欲天の一なり

都幸天 これも六  
欲天の一にて切利  
天よりハ優れる  
所なり譯して知  
天といふ

須弥山 譯して妙  
高山といふ人間世  
界の外あり委しき  
況ハ俱全海あり

舍衛國の人云々  
経律異相廿三小蓮  
花女經と引て曰く  
佛在羅閱祇者園  
崛山有婦女名云蓮  
花善心自生便棄世  
事作比丘尼即諸山  
中到佛所未至中道

有流泉水因飲水澡  
手自觀其面像姿形  
無比便念言云何自  
棄作沙門耶且當少  
時快私情尋即還家  
佛知蓮花當得度化  
作婦人端正絶世勝  
蓮花女尋路而來蓮  
花見之心甚愛敬問  
化人從何所來夫主  
中外皆在何許何獨  
行而無侍從化人各  
言從城中來欲還家  
雖不相識可俱還到  
向泉水上蓮花言善  
二人俱還到泉水上  
陳音委曲化人睡臥  
枕蓮花膝須臾之頃  
忽然命絶捧張真爛  
腹潰虫出云々蓮花  
見之心大驚怖云何  
化人忽便無常此人  
尚爾我豈得久故當  
詣佛學道即至佛所

もの、のあらば切利天にうまる。いかにいもんや。この  
女房のいづれう法花經をよみたてまつらせ給はざ  
らん。都幸天にむまき給ひて極樂に安樂し給ふべし。  
いもんや金銀瑠璃真珠等をもて、書寫供養志給へる。  
あはれにたふときまなり。此御心ざし須彌山よりも  
たらく、四大海よりもふろし。たゞいまの御身どもハ、  
色々の花のたもとをふかく淺くにほはしかほり、構  
檀沈水に志みかへり、御かほハ色々にさいしき給ひ  
て、鏡にうつさるかげを見給ひてハ、かの舍衛國の女  
人の、こが顔ふしと見けんにもれとらず。九重の宮の  
うちに遊戯し給ふる、彼の切利天のけらくをうけて、  
歡喜苑のうちゆげするにたたらば、喜見宮殿にゆ

げするにもまさる。劫波樹の白玉磐石に座し、陀提尼  
の殊勝の池に沐浴し、四種の甘露をふめ、五妙の音樂  
をきくに三十三天の微妙の天女にひとしくれたす  
る御身どもの、いうにたがしたるまふ。春の花のち  
るをきて無常をさとり、秋の本の葉のたつるをみて  
うれへ、曉の霧のたふみだをおがし、朝の霜のあさ  
日に消えゆふべの露のたのみすくなく、いりあひの  
鐘の聲けふも暮れぬときくを哀ま給ひて、いふしへ  
のふるき歌をねこし給へり。うつハ憑み仕うまつり給ふ、  
皇太后宮あらびに一品宮の御息災をいのりたてま  
つり、かつハわたくしの二世の大願あひかなひ、一切

云々この故事也  
歡喜園 切利天上  
ある園なり喜見  
城も  
却波樹 却波ハ長  
生の義あり  
陀枳尼 夜叉部み  
して威福を掌る者  
あり大日經疏云尼  
けふも暮れぬ 拾  
逸集哀傷部云後  
人不知  
山寺の入りおれり  
ねの勢ごとくふ  
もくれぬとさくぞ  
かち一き

衆生をして、ねあじく現世安穩後生善所の思ひどげ  
志めむとねほしたり。妙法一乘の經典、文字ことにむ  
なしかるべうらず。綾羅錦繡黄金珠玉のかざり給へ  
る衣の裏ふ一乘のたまをうけ給つ。決定して二世の  
大願あひかおはじやかどぞいふ。あはれにめでたき  
みれほりもどまねびやるべきかたなし。ことごとく、  
ありつる祿つゝ、みぎぬどもなどそへ給はりて、まか  
りいづる程なほ人よりことに見ゆ。御堂の所司のも  
の題名僧みお宿えつゝ、たちぬ。殿ばらいみじう宮の  
女房を心にくきものに感下給ふ。經ハ經藏にをさめ  
させ給ひつ。女房宮にまゐりてげふのりども啓すれ  
バ、かひありてきこめぬ。

此殿の二位の中將  
中將の子の三位  
中將といふてあり  
かゝるかき様あり  
不多しお家の事を  
いふたり

かゝるほどに霜月になりぬ。このころ中宮太夫とい  
法住寺のね為光の御子の大納言齊信をぞきこゆる。年頃  
御子あまされはしぬべうりしを、皆うしなひ給ひて  
たゞ姫君ひとりをもぞ、えもいはずかしづきたてゝも  
させたまへる。うちにとぞねほし心ざして、三條院の  
宮たちおどさやうふ思ひきこえ給ふ。りしかど、思  
したえたるに、今のみ後一条といとわかうねはしまはる  
へ、中宮成子又うぎりふくてねをしませバ、思したえたり。  
又東宮後朱雀にかん皇子の殿さぶらはせ給ふ。かやうなるにハ、  
いうでるとねほす程に、此殿道長の三位の中將ひとりね  
をすむバ、それにやと覺したちてむことりきこえ給  
ふ。年ごろハ何事をうハ。たゞこの御うづきより外

文集の御屏風  
の頃文集といへば  
白氏文集の御屏  
めできき侍の心  
へをかけるなるべ  
し一本小文選とも  
ありいづれも

と人 例人  
まてとびく  
まてとびく

のすあくればぼしたれば、御てうど共よりをじめ、よろ  
づの御ぐともうぶやくやうに、漢書の御屏風文集の  
御屏風ともたど、志あつめ給なれば、げに内春宮にま  
り給ふ。女房もとよりいと多かるとのなれば、心こし  
ふえらむせ給ひて、廿人童四人志もづかへたあじり  
なり。ざばりり物ごのみを、昔より物はあやかなる  
わさりにて、いみじう志つくし給へり。男君十八にや  
ありたまふらん。女君はいますこしまさり給へるな  
るべし。御かたち有様と、のほりはて、いみじうめ  
でたうあてやかに、うつくしうなまめまき給へり。御ぐ  
したけ五れほくあまう給へり。たゞ人にみえ給えん

むあり法匠の列を  
いふ宮ぐとあど  
も参り給ふべき  
あから居下の列  
嫁せるいとせり

てけおめりも  
てけい天氣あり  
土佐日記にてけ  
る権取の心ふま  
せつとあるもお  
し

對ふつけし  
云々 對とら寢殿

を、をこしげになん。手いとよくかき給ひ繪なともいと  
をりしうかき給ふ。男君いとかひあるさまに思して、  
いでいりかよひ給ふ程に、五節になりぬを、そのこ  
ろの御ありさまなどをたどと志たてたまへり。御堂  
にもめやすければしみたてまつらせ給ふ。五節のは  
つる夜この大納言殿に火いできてやけぬ。雨のどか  
にふりてけおめり日たりけるに、三位殿も大納言ど  
のも、五節なれば皆うちにはしけるをりしも、あさ  
まじうのこりなくてやみぬ。心うくあさましくいみじ  
とも世のつね也。つとめてよろづの御とぶらひども  
あり。御むことりの後この十よ自にこそハなりぬれ。  
折しもくちをしういみじ。これよりはどめ對につけ

から対の屋の  
せつたりし故  
火しるすといふ

さじき 物えんた  
め假亦作りおたる  
所などいささきや  
といふ

音ホ 此巻をかく  
名つけし供養の  
例の法蔵寺供養の  
事ありて所所の物  
の音といひみど  
く面白しこれ皆法  
の形なりとかける  
ふなり

たりしをうしこりけたれにしを又その此ち十餘日  
ありて人のたゆみたる程ふかゝるなりけりいとあ  
やしきさるべきかたきなどもなきにとれほしたるが  
らすゝろにいできたる火のさまなれば猶いろなる  
ことにうと、殿のうちの上下思ひたり。一條のさじき  
殿にわたり給ひぬ。

音ホ 音楽

御堂供養治安二年七月十四日とさどめさせ給へり  
ばよろづを志づ心をうよるをひるにれほしいとを  
ませ給ふ。池をほる翁のあやしきかげのうつむるを  
みて、  
くもりなきかゞみとみづく池のねもにうつれる

かげははづらゝきうな。といふを聞きて、かしら白  
きれい法師、

かくばうりさやけくられる夏の日にわがいたゞ  
きの雪ぞきえせぬ。といふも物をねもひふるよやと  
あされなり。東の大門にたちて東のめをみまば、水  
のねものまもなく、いかだをさし、ねほくのくれ材  
木をもてまこび、ねほり、御だうのうちををさらし  
もいはず、院のめぐりまで、世れ中の上下たちこみた  
り。よろづにみがきたてさせ給ふまゝに、院の中、金剛  
不壞の勝地と見え、めでたし。國々の受領ども皆れ  
ほせごとのまゝに、さまぐの物どももて参りこみた  
るを御さらんずれば、たきてれほせられたるよりも

金剛 こゝみて  
ハ唯かき由い  
つり解洗水天を金  
剛と稱するとい異  
也

さしまゝみえもいはずめでたうしてもてまゐりたり。我もわをもとれとらどまけじと思ひたるけしきども、をうし。七寶をふりにふりふもより来るとみえて、目も招ふをぬ御有様なり。さきぐの御堂の會によろづハみあつくさせ給へれどこのたびハ、行幸行啓あるべうれがしおきてさせ給へりけむ。その御よういありさままうけの物いと心ことなり。上達部殿上人の御祿樂人まひ人のつかけ物までいみどらきよらにればしめすに、又七僧百僧の法眼ども清僧たちもこのたびの御いそぎを大りに出へり。お方の装束どもわらはべほうしをらのなりまでおづ

法眼 俗住あり法  
印法眼法橋の三等  
あり

心なり思しいそぎたり。やむごとなく又若やうならんなどが、いそぎささぐいこと口りなり。年などもたに、久しくもあるまじき僧たちの、いそぐさまもいへばねろりなり。二三日かけてハ、武樂といふやせさせ給ふ。その日をあへて、人まゐりつくぐもあらざなれば、けふだにとて、老いたる若きまゐりつどふ。七八十のおうなれきふ、杖ばうりをたのも、きものふていでたちたる様いみじうあはきなり。御堂のたまへのもなりふ舞臺ゆをせて今日かの日の舞ども、のこりあく志つくさせ給ふ。目ごろともまれば雨ふりて、此程の御ありさまいりみくと申思ひて、この御堂ふもさまぐの御いのりども、ふも山の佛神にもいみじ

武樂 神社佛國お  
どめて赤を奏せん  
おまごつ前日武みを  
まゐりなり

よみづと ふみづのつとを略せし黄泉の王座おせんとあり

きりどもありつとバよや。けふいなるごりあくはれて、ひごろのなごりたし。このあやしの者ども、あまりあるまでれまへ近うたちこみたり。人々いと見ぐるし、かれすこしのけさせよ。どの給はまれば、このえもいとぬたゆどもはらはきて、かの法急の目ハ得参るまじければ、かこうかまへてけふ参りたるなり。あが君や。ふみづとにし侍らんずるなり。たすけ給へとて、手をするも哀にて、得きはやりにも逐はむ。かくよろづの身を志とりのへさせ給ひそ十三日のよさりかんの殿上東西殿にれましませば、ひとつ御車にてわたらせ給ふ。女房車どもみかこの御たりの西の廊にたろさせ給ふ。御前たちハ此堂の西の底ひとつさ

唐のゆき 蛙抄も唐車号唐車是也太上天皇乘ゆ之女院乗用有例撰関氏晴日又素之云々  
と見ゆ其製え枕花  
葉葉を委し元采  
天皇々后々限り而  
輿ふめさる、空ふ  
れどこれハ略儀の  
体なり  
まひき ち引のま  
きりこハ概ま以  
上あらでハ乗用は  
るを得ず清は以下

るのかたかけてぞれはしまは。かんのとの、女房やがて同じ方の廊お招りぬ。皇太后宮の御むらへに、関白どの参らせ給ふ。中宮内子ハ内にれましませば、うち内子の大殿上達部殿上人諸太夫おのくわかまきくまる。いづれも御輿ハ所せけきバ、皆唐の御車にてぞわたらせ給ふ。御有様いとよそほし。中宮の御車にハ、二條殿道慈女の御方候ひ給ふ。皇太后宮の御車にハ、一品宮陽明門院はしまは。五の御かたつかうまつり給へり。宮々の女房だの、二三人づ、ぞさぶらふ。大宮のれはしましつるやうふ、西面の大門よりいらせ給ふ。大宮おハしませど、御車ハ中門のどより、まひきにていらせ給ふ。ありつるねおし御つぼねふいらせ給ひぬ。皇太后宮

八謂てゆる輦車  
之宜旨とて勅許  
得て乗る例あり  
抄云々諸国二分  
冠綉褐白狩衣袴  
藁匣中引之見之  
たり

中宮の女房みち東の廊にさぶらふ。南の方なるらう  
にハ、小一條院の女御殿をします。阿彌陀堂の南の  
廊にハ、開白殿のうへにはしまは。金堂鑑イのもとのらう  
ふハ内の大殿はしまは。春宮賴宗 齊信中宮の大夫殿たち  
のふのゆきまきもあり。経藏の南の廊ハ、三位中將のう  
への御東、云四ひきつづけて、えもいはず乱まのりこ  
がれて、女房ぐるまなどの候ふも、見るふ今めかしう  
いみじ。殿のねまへハ、ひむがしのついでくづさせ給  
ひくせに中のくるまどもまるりて、物見るべきやう  
におきてさせ給へりさるべきやむごとなき御車ど  
もたちこみぬれば、わろ人の車寄りくづりもあらぬ  
バ、この南のらうの方などにたちこめど、それもその

ひきへぎ 西宮記  
十三膳時部六衣冠

大門のとに、きぬやうちて、こゝらの僧のそこより参  
るべければ、近くを得よりまゐらず。行幸行啓をだよ  
見んとてぞ立ちこまためる。かくて目うらゝかにさ  
しいづる程に、御かたぐの女房達のさぶらふみすぎ  
はの程見わたせば、みすのあまごまよりはとめ、へり  
までよのつぬならず、玲らかなるまで見ゆるに、朽葉  
女郎花、きちかう萩などのおり物、いとゆふなどのす  
そこの御几帳、むらごの紐どもして、さまぐ心をへあ  
る繪を泥してかゝせ給へり。えもいはずめでたき袖  
ぐちきぬのつまあどのうちいだしわたしたる、見る  
に目かゞやきて、何とも見わきがたし。そが中にもく  
れたる、あでしこあどのひきへぎなどのかゞやきわ

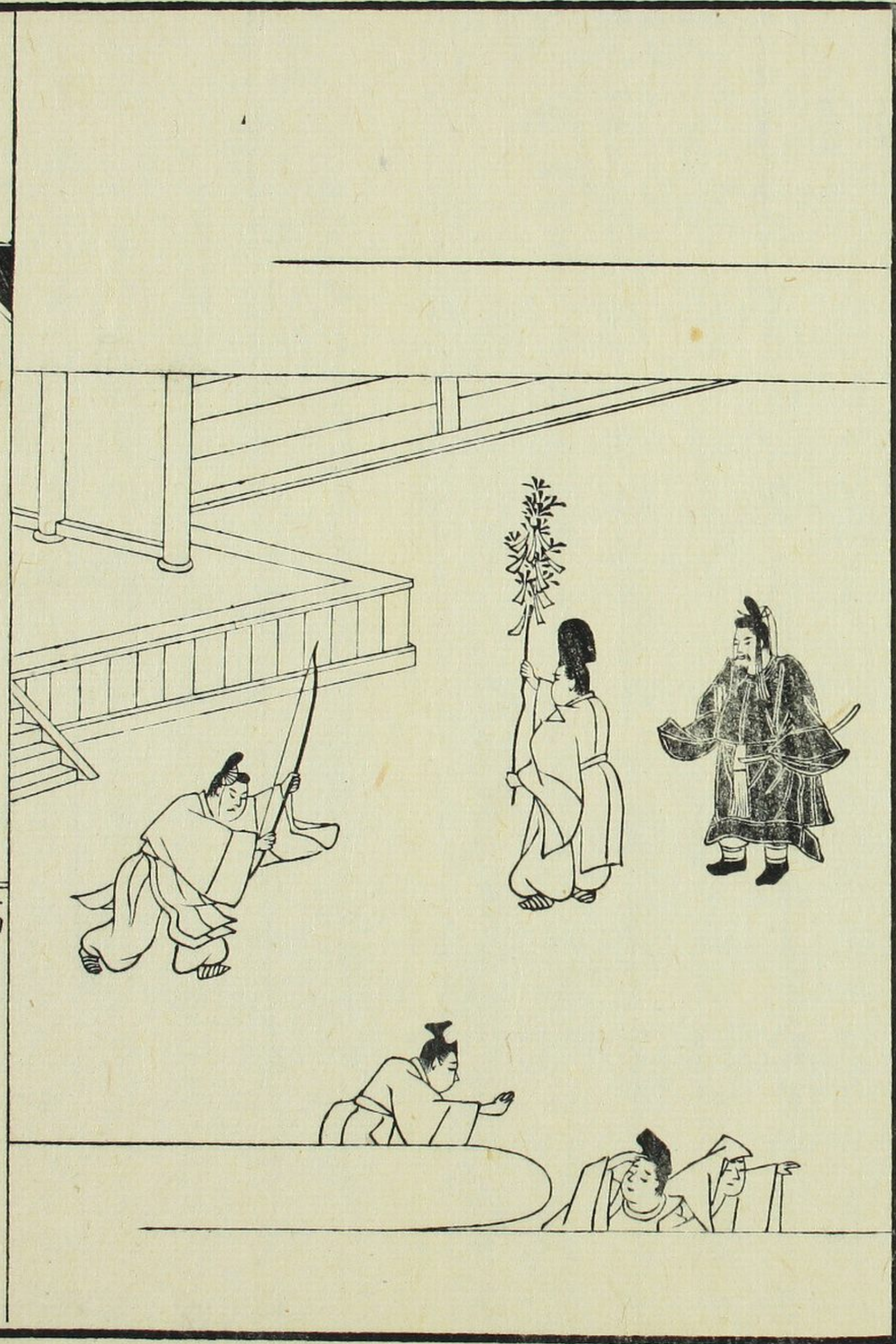
類とあげたる條不  
曳信文四月八月九  
月之間用之と有り  
略していひへぎと  
もいひ衣のうらと  
引てがしてひくとへ  
にあらる物なり  
亮時東抄雁衣抄拾  
要抄などを見あし  
するふ極暑の頃着  
せるものといふや  
くさのかり 和名  
抄香名類小禮記註  
曰芸香草也和名久  
佐乃香と有り此の  
草をもて染めたる  
ものらむ

たるふ、きちかう女郎花、萩くち葉くさのかうたなどの  
織物うすものにある、いとゆふむすび唐衣あどの、  
いひつくすべうもなき、唐紅のみへの袴ども、みな  
綾あり。批新子杷殿の宮の御かたに、いまた此いろく、此織  
物うすものどもを、ねなごうむよてこの袴のうへに  
重ねさせ給へり。またこれあうりつるすと、いみじう  
めづらうなり。この御かたぐ、聞えあはせさせ給へる  
にもあらば、みな心々にせさせ給へるに、同じいろあ  
らぬ程など、いみじうをかしう見えたり。是れに又と  
の、うへへの御方ねとりげあし。これのみなら、院一條の  
御かた、關白殿、内大臣殿あどの御かた、ぐいみじうせ  
させ給へり。見えわたしたるふ、これこそ、日本國のい

天人などのかざり  
枕草子八ふ薄ふ  
びの唐衣おなじも  
のひとへがさね紅  
の袴いももきての  
どりたるハ天人ふ  
どこそ、はひのみまじ  
々れと空ううおひ  
たるよやとぞえゆ  
るまくとあるを必  
ひ合まへし

みじき大なるけと見えに、いそんかたなき心ち  
すべし。天人などのかざりも、かやうにくそはと、推量  
らきてめでたし。樂所の物のねども吹きたてたる、え  
もいはずれもしろし。この物見るものどもあかいと  
じと見けうずるほどに、御前ちかうまるうれば、か  
たいらいたく見ゆる程ふ、捨非違使宗輔をめぐり、か  
きすこゝのけさせよとの給はすれば、赤ききぬ着た  
るものどもいできて、ゆみづえ志てたうちにうて  
ば、とよきてにげの、ある程に、殿のゆあいと心ぐる  
一げに御らんじやりたり。はらひやめば、ねあじやう  
ふたちこみぬ。この中に法師笠きたる者ぞ、るあか人  
なめり、とこえたる。うくて亂聲をさへし、あはせたれ





すろり 鐘樓の字  
音なり

龍頭鷓首 船の飾  
りなりもの形  
を刻きて付くるお  
り海の子ふ本恒訓  
云龍頭鷓首吹以  
祭云々注云龍舟大  
舟也刻為龍文以為  
飾也鷓大鳥画其象  
著船頭故云鷓首舟  
中吹籥與字以為樂  
故曰浮吹以娛云々  
とあるふて知るべし

はいとゞいみじうれどろくしくいらなるにうとれ  
もへば、行幸のたはしましよれば、このもんの人々は  
らはきてはぐる音なりけりやうくたはしましよる  
程ふ御覧トやらせ給へば、恒藏するう南の橋などの  
旭日ふてりかゞやきたる御覧じやられたるハ、いと  
あさましう御目も及はずたはしましよて、大門いらせ  
給ふ程、左右の船の樂龍頭鷓首まひいでたり。曲をあ  
はせてひゞき無量なり。笙をふき絃をひき鼓をうち  
功をうたひ徳を舞ふ。御らんずる御心ち、この世の事  
とたぼされずいらせ給ひてに、の中門の北の廊の  
南の階に御輿よせてたりさせ給ふ。關白どの、ゆさ  
トきのまへをわとらせ給ひて、阿弥陀堂のまのこよ

ゆえらし云々  
劍なり下なる御  
こハ單の箱をいふ

りねをしまりて、東の渡殿にゆ座よそひてたはしま  
す。つぎの渡殿に、東宮のゆ座ハさせ給へり。御とも  
の内侍ども、たまへまをえつかうまらで、三位中将<sup>朝任</sup>  
の御はかしとらせ給へれば、御をこハ頭中將<sup>公成</sup>とりた  
まへり。内侍御かゞの御らんずるを、はゞかるべし。  
入道殿べちふるさせ給へれば、關白殿内大臣どの、御  
をしのこなたよりかへらせ給ふ。後條<sup>後條</sup>の御前佛の御  
まへふ参らせ給ひて、をがませ給へば、入道殿見たて  
まつらせ給ひて、御をみだせきもとゞめずあかせ給  
へを、けぢかう見たてまつる人々、えのごひあへぬさ  
まなり。御門の御有様のいみじうと、のほりめでた  
くたはしますを、大宮<sup>上東</sup>の御まへ、おいていかに見たて

髪あげて云々 供御の給仕を奉むる者髪を結ひあぐるハ礼なり御膳お落うくらぬこめ也  
えんた 庭上お遊を志きてなとする  
ひそやうふ 幼くさくやうなるまの

まつらせ給ふらんとおもひやりまゐらする人々さくりもよくなり。みかどをしまし所にたをしませバどの、たまへをはじめ奉り、關白殿内の大との皆さぶらひ給ふ。内大臣どの、御前にて行幸の程物み車のいみじうめで申しつるこそどももの、きこえ候ひつるすと奏し給ふ。御めのとの内侍のまけたち、さるべき女房どもみな髪あげて、おもひまゐらするありさまなべておらずいみじうせさせ給へり。志ばしありて、後朱雀春宮の行啓あり。そのよし奏して、御車かきれるしく、中門のとより、庭道へきてあゆみいらせ給ふ。御車公季お關院のれとゞつらうまつらせ給へり。宮いみじうひはやかにめでたうていらせ給ふ。行幸にありさま

辞ありひもほそふどもいふ  
ひやすまゝ 休  
幕の略あり 羽儀式  
四臨時の上殿上侍  
居賭事條は休息  
幕ともある是なり

ひらそり 和名抄  
屏障具ふ周 礼注曰  
平張曰帯和名比良  
波利とあり

宝蓋 同抄伽藍具  
二燈架終曰宝蓋和

ことなるまどいみどうなまめかしく心ことなり。太夫よりはじめ宮司殿上人つかうまつれり。扱御やすまくにいらせ給ひぬ。上達部ハけふの御堂の東のひさしにつき給ひぬ。殿上人諸太夫ハ、西の廊のまへなる、ひらはりにつきぬ。藥屋ハなりじめに志さり。御通經の物どもれをまじく中島にひらはりしそ、おほやけよりはじめ、宮々の祿の幸櫃ども色あらくれどろくしくて、みおこの御堂のそばのかたにかきまゐりためり。かくて佛のたまへり。座よりそひて、上のたまへり。妻官もれはしまし。殿のたまへり。そのたにれはしまし。佛のたまへり。講師、後師の高座左右にたて、かまふえもいそずめでたき寶蓋おほひたり。中に禮盤

名岐沼加散又有白蓋高屋上具也  
ひじりこ 檜物細工の標子あり和名抄行旅具お標子俗所謂破子云々といふ  
ゆ行旅ふたづさぶる食器にて箱中お障あるよりの名あり  
迦葉尊者 かせうそんとやくむべし釈迦如来の高弟なり  
賢護長者の家々大空積経百九ふ云く長者賢護家中不可称量其富貴又其長者欲食之時則有六萬難種美味飯食微妙香美猶若天厨等者異也其飯衆皇梳糧色味充盈具八功德意進暇入

たてたり。今ハまやくのれまつに物ども参らせ給へり。女房の中にをかしきひじり子たきいと今めかしう。見所ありてせさせ給へり。上達部殿上人など皆もの参らせ給ふ。迦葉尊者の室にもいまだあらざる臥具をきき。賢護長者の家も、あるまされなるおん<sup>歌</sup>きどもなり。まやくの女房の心ちどもかの切利天上の億千歳のたの志々大梵王宮の深禪定の樂しきも、うくやとめでたし。まてあさましく目も心も及むずめづらかにいみじうりつる日のありさまを、世中のためしふかきつゞくる人ればかるべし。そが中もけぢかく見き、たる人ハ、よくればえそかくらん。これハ物もればえぬあまぎみたちの、おも

口便銷食已随順無所妨礙果報感致称心自然又復食已身體光輝是湯泉穢切利天上の億千歳の<sup>院源</sup>の<sup>院源</sup>に<sup>院源</sup>せ要集十一ふ云く彼切利天上億千歳樂大梵土宮深禪定樂此等諸牙不足為樂云々

ひくふかさりつう、すきバ、いらなるひぐるあらんとかたをらいたし。目くる、ほどよそ内東宮かへらせ給ふ。ゆくり物ども、上達部の祿殿上人のかつけ物おどいみじう御心にいさ、こまうたるさまにたきてさせ給へり。けふの講師の山の<sup>院源</sup>僧正にふさせ給ひつ。御佛つかうまつれる佛師定期ハ、法橋になさせ給つ。御堂つくりつうまつれるたくみ共かうぶり給はせ様々のよろこびども忘たり。との、れまへの御涙ハことごとくに見えさせ給へり。ればうたいづれの人もいみじうこそ思へたりつれ。

玉おうてな

御堂あまたおあらせ給ふま、お浄土ハかくこそと

玉のうてな 此米の名ハ交野の尼君といふがよめる歌の詞ふられるる奥

小足ゆ

見えたり。れいの尼君たちあけくれまゐりてをぐみ  
たてまつりつゝ、よをまぐす尼ほうしたほかる中に  
心あるかぎり四五人ちぎりて、この御堂の例時にお  
ふわざをなん忘ける。うちつれて西堂に参りて見た  
てまつれば、西にふりて北南さまに東むきに、十餘間  
の瓦ぶきの御堂あり。たるきのもしぐハ金のいろふ  
り。よろづのうたものも黄金あり。御前の方のいぬ  
ふせぎは、きんの漆のやうに塗りて、ちぢひめごとに  
螺鈿の花がこをまゑて、色々のたまを入れて、かみに  
ハむらごのくみして網をむまばせ給へり。北南のそ  
バのりた束のもしぐのとびらごととに繪をかゝせ給  
へり。うゑに色紙形をして羽をかゝせたまへり。はる

いぬふせぎ 佛の  
前まつるひくま  
拾子やうの物こ

うふあふがれてみえがたし。九品蓮臺のありさまあ  
り。うゝろの御堂のいたゞきを見いるれば、鏡の様  
にて外なる人のかげさへうつりて見ゆ。色バ、このか交  
の、野、尼君、

くもりなくみ  
此歌風雅な十八  
親教部ふ裁せたり  
春の名これふよる

くもりなくみだける玉のうてやまを、塵もゐがた  
きものふぞありける。  
はるかく年も暮れぬ色バ、土御門殿に大宮上東をしま  
せバ、正月朔日行幸啓をどきまぐ今めかしうて、  
ぎもてゆくに、司召になりぬれば、殿の三位中將、中納  
言長家ふ成給ひぬ。大納言齋信殿いとゞいま一志ほの色まき  
りて、かひあるさまにねがさるべし。その月もつうさ  
めしのよろこびうらみよて、すぎもてゆくめるに、中

大納言殿いど、今  
一、一の色云々  
長家ハ齋信の女塔  
なれをありし、今  
の色まきひの色か  
り

紫雲地物語抄

このさしき殿 本  
家焼けておぼろしく  
一條のさしきやみ  
移れる由上不見え  
たり

もつせふ参り云々  
是よりさき公任  
々の姫君天王寺小  
詣でたまへるかへ

宮齋信の大夫の大炊御門やけよしのちい、このさしき殿  
に中納言殿をも給ふに、二月廿五日に、そらちう火い  
できてやけぬ。いみじうけしからぬわざかたつとよそ  
人もあつかひきこゆべし。又ほりへわたらせ給ひぬ。  
賀茂のまつりも遠うらぬほどにて、くちをしくたほ  
さるべし。大炊御門もあさましくて焼けに、又い  
りなるるふうとかつゆぐたぼせどかひあし。御堂よ  
りよろづこまやうに抱しをりきこえさせ給ふる  
どもあり。宮々よりもさまくの御装束ともあまごどか  
たはしたるべきうにもあらぬわざになん。三月ばり  
りふ、四條大納言公任はつせふまゐり給つり。かへさよい  
づこ河のもとにて、こゝぞうし。みたけのろへさに、姫

さふりせ給ひしや  
ありき其折定れハ  
ひ獄ふまうでしか  
へるさ此川のと  
りふて事の由をす  
きこむはなり  
こゝひの森 枕子  
子ふも見えて伊豆  
國ふありとぞ捨違  
集ふ  
こゝふごふつれ  
づせとさく時書  
ましこゝゝゝの  
本はいりふそ  
などあり子をまふ  
るふかけたるおれ  
バ子こひの假字あ  
るぞし  
御裳着 此巻ふハ  
一不宮のほもぎせ  
させ給へるふあ  
ふよりて然若づく

宮の御事き、侍しハとて、定頼の君、  
見るごとしに袖ぞぬれける。いづみ河うきことき、  
しわとりとれもへば大納言公任うちなき給ひて、  
いもせふよそよきくだみ露けさに、こゝひの森を  
おもひやらなん。いみじうあはれにたぼしたりとか  
んき、侍りし。

⑤ 御着裳

四月ふハ枇杷妍子との一品宮陽明門院の御もぎとて、春よりよろ  
づよいそがせ給ふ。との、たまへ御物の具どもえも  
いはずとゞのへさせ給ふ。なべてからぬ御もどもを  
たぼしいそがせ給ふ。御裳の腰ハ大宮上皇ゆひ奉らせた  
まふべけきバ、この宮妍子ハさらにもいをずかの大宮の

女房の装束なども。三日のほどの事をなればいとじき  
御いそぎなり。治安三年四月一日ふぞたてまつりけ  
る。その日のつとめて、土御門殿へ上棟わごらせ給ふべき  
なり。一品宮の御めのとたち、おにわざをせんといそ  
ぎたちたり。御めのとなど、ハものまめやりになとあ  
しうすべけれども、唐衣裳のこゝふど、山をたて水を  
ながーおきくちをしらてんまき急をいむぢをやり  
たまをいれ、すべてえもいはぬもどもを志しり。わり  
き人々はたまいて物ぐるほしきまで心のまゝに志  
たり。大宮よハひめ宮の御れくりものや、おにやかや  
とよろづをかきあつめいそがせ給ふ。あるかぎりの  
女房はほろげからぬハ皆つかうまつる。どーなると老

山を立て水をあぐ  
し云々 刺繍織物  
などの模様お種々  
の細工をさる由か  
り

いみやづらへなど物りくてさとにゐたるハこのこ  
ろたまへのまめわざに、まゐりなるとそなうんさぶら  
ひける。つごもりの日の夜さり、さるべき女房参りこ  
む。又一日のあうつきあどにぞ参り集りける。土御門  
殿の西の對にぞ御装束あどハつらうまつらせ給ふ。  
つねのたよあるを、このたびハまいて御調度どもを  
みあもてまゐりつらうまつれば、えもいはずあたら  
ちうかゞやけり。殿上人宮人まゐりこみてゆめれハ、  
げにいみどきみものなり。女房よろづを志しりのへ、  
今いたゞ顔ひとらをみがきささく程に、たまへにハ  
中宮より嬉子うんのとのより、頼通關白殿内教通大殿よりなど、い  
みじうさまぐなる御衣ばこどもに、御装束ひとぐづ

西かへり使者への返礼お祿を出す  
みさこがーきふま  
ぎれてなしとなく

づみ御扇やたき物などさべき様にて皆そへさせ給  
へり。御つかひども御かへりなごさわがーきにまぎ  
れてあし。院小藤よりもえあらずせさせ給へり。歌なども  
あまごいだしぐるまごも皆あてまあり。殿原まあり  
つつまり給へれば、さこがーうえ御らんとわりぬあ  
るべし。式部卿宮中敦平務宮より、さあぐいみじき扇ども  
ぞあめる。女房のかずねとなわりきたなどのきをめ、み  
あ覚にえりあつめさせたまへり。かくてふろづの儀  
式に目くれぬればどの御かたより時ありぬくと  
たびくは消息ありあるべきやうい寝殿ふ大宮れば  
しませばそなたにぞまらうどの宮の西方ハわたら  
せ給べけれど西のたいの御志つらひの玉をみらう

以覽せせん此  
下流布本脱文あり  
今古本を以て補ふ

せ給へるを、御覽せさせん御心にて、殿の西まへの  
御定のまゝなるべし。大宮西の對にわたらせ給ふべ  
けと。皇太后宮ハなりのわと殿よりとほらせ給ひ  
て、寝殿へわたらせ給ひて御むらへあり。は度ハ諸共  
ふふた宮打つゞきてわたらせ給ふほどあふめでた  
と見えさせ給ふ。さ御裳小樹なと奉りたり。御ぐし  
つもとあがさせ給へり。いへばねろりなり。御ありさま  
ども繪ふかゝまほし。うくてわたらせ給ひて、御志つ  
らひを御覽せれば藤のまそこの織物の御几帳ふを  
りえごをぬひたり。ひもハむらごのから組あり。御帳  
同じ様なる。御屏風あどいみしうめでたし。わが西有  
様をこそ限りなうと思しめしつれ。はたびの御調度



五天 たいけ五天の  
屏風をさういふ次  
ふる四天もおおじ

ども、めづらうにいとどろ御覧せらる。御凡帳御屏風  
のほねあども、みな螺鈿蒔繪をせさせ給へり。五尺ハ  
本文をうゝせ給へり。色紙形に侍従大納言そのふこ  
どもを真にうるはしうかき給へり。四尺ハからのあ  
やをはらせ給ひて、志きしがたふうすたんにて、同じ  
人さうにうき給へり。志た急にハえさる御子すべて  
いたんかさなくをうしげなり。唐錦をへりふあさり  
御具どもの蒔繪らてんのひまぐに玉を入れさせた  
まへり。たほかたえまねびつくさずみすのへりにハ  
まき大もんの織物をぞせさせ給へる。御とあぶらの  
ほのうなるに、姫宮いとねぶたげふれをしますに、と  
の、御かたより、時すぎぬべことのみ申させ給へば、

禰子

ひふか 難入形の  
ふかき 本居宣長  
の流ふひひなひひ  
かの延びたる音便  
なればひいおれ後  
字なるふしとい  
へり

大宮の御めのとの内侍のすけ御とあぶら近うとり  
よせて候給へば、大宮のたまへひめ宮をみたてまつ  
らせ給ふに、いみどりうつくしげに、ゆぐりのうり  
たるほごなべてたさらずめでたう見えさせ給ふ。ひ  
かなどをつくりたてたるハをうしげなれど、たをや  
うならねハくちを。繪ハめでたううきたれど、物い  
はずうごかねバかひふし。これハひつたとも繪とも  
見えさせ給ふもの。あらうたげにうつくしう、あま  
めかいうにほはせ給へれば、御めほかへやらせ給は  
ずみたてまつらせ給ふ。御めのとたちなど、近うハえ  
まゐらず。みち御几帳御屏風あどのうしろふ候ふ。今  
ハ志ろき御ぞどもたてまつりかへて、御ぐしあげに

ひさあそび  
後世ハ弥生の節  
向ふ限りたれど  
昔ハいつふてもせ  
しむさびなり

を赤宰相の内侍のすけまゐり給ふ。あふみの三位ぞ  
まゐるべけれど、それハこの一品官の御ちづけに参  
りたりしうば御めのとのかずにいりて候給へば、そ  
れハめづらしげなくて、めさぬありけり。内侍のすけ  
みたてまつるに、滅ぶうつくしうれハしませば、めで  
たうみたてまつる。大官上東春宮後朱雀をこそ、きよらに杞ハし  
ますと思しめしけるに、是ハいとこまうにうつくし  
う、あけくれ我物にて見奉らば、やとのみ覚しめされ  
けり。ないしのまけ詞只今の由ありさまあぶら東宮の  
うへにならびきこえさせ給へらば、いふひ、なあ  
そびの様に、をかうれを志まさんと啓せ給へば、宮  
宮わらませ給ふ。かくて御裳きさせ給へれば、夜ふ

八重山吹をうぐれ  
ば云々 美しくし  
装束するを此は  
花を折るといへり  
さればくも山吹  
色の衣ふそひさる  
由をうへなる織り  
物の多ふあらむさ  
て上ハ八重山吹と  
いひ下ふひとへふ  
をかうらとらる  
文のあやなり  
みこひびり 松林  
抄中未済を所部  
御子五三條坊内南  
大宮を幸ひて家  
長家御領之とま  
り中務御兼時取  
ハそのかみ尤も  
筆の聞えおとせし  
なり

けてあすもとてかへらせ給ふ。又の日、大宮の御かた  
の女房からなでしこのきぬ、まらうどの御方の女房  
ハ、やへやまぶきをりたれば、ひとへよをうしう見え  
たり。三日まをハれは、しますすべけれども、目ついで  
阿しければ、二日のよさりうへらせ給へば、一品官の  
由おくり物に、志ろがねこがねの御をこどもも貫之  
がまづりらりきたる古今廿卷、又こひだりの書給へ  
る後撰廿卷、道風がかきたる萬葉集などをぞたてま  
つらせ給ひける。世よあうめでたきものども也。故園  
融院より、一條院にわたりたりける物どもあるべし。  
世よ又たぐひあるべきものもあらずなん。さて上  
達部殿上人あぞひくらし給ひて、よさりハやがりて

おくりつうりまつり給ふ。

かくて賀茂のまつりなども過ぎて、五月になりぬ上東犬宮つちみりど殿にれをしませば、殿の御まへ、なほわざをして御覧せさせんと思ひめして、この殿の御まやのまぐさのたぬ殿の北わたりせが井のもとにぞう急ける。このごろ植うべうりければ、みまやのつうさめして、この田う急ん日ハ、れいの有様あがらつくろひたるまをくても、ものをこがまうもいりにもありのまゝみて、この南のかこのうま場の西門よりあゆみつづかせて、らちのうちよりとふして北さまにわさまべし。うしらの方のついひぢをくづして、それより西覺トやるべきなり。東の對にてふんゆらん

せが井 併馬車  
せがみの水とひ  
さてもていなく  
どもあそびてあり  
んなどある是れ  
流布本ハハせらる  
んとあり清和院ハ  
松林抄中末に正記  
町南京極西清和母  
后ハ在所とありい  
づれあり

今二三日の程ふ  
此下脱文ありても  
るのこしたらぬ心  
ちて聞えがたし

もころも 蒙ふ似  
なる短き袴あるべ  
しはべて此あり  
のさまハ下なる増  
み就てはるもひえ  
はるもく此書の繪  
ハ皆よりどころあ  
りて記しするふ豆  
るべきものぞ  
はぐるめ 和名抄  
容飾具ハ黒齒俗云  
彼久路女とありふ  
おも同抄ハ粧粉和  
名聞途程赤也深使

おどべきとれほせうけ給りて、いま二三日のほどか  
ふわざをと思ひてその日になりて、かのすみのつい  
ひちくづさせ給ひて、東の對ハ宮の御まへをまじめ  
奉りてどの、とわたらせ給ふ。さるべき人々女房達  
候ふらぎりハ参る。さて御覧せれば、あううきたたげ  
あき女ども五ろくおんをうりに、もどろもと  
ゆふ物ゆと志らうきせて、白き笠どもきせてはぐる  
めくろらかにつけて、べよあかう化粧せさせて、つづ  
けたてたり回あるじといふれきあいとあやしきき  
ぬき、やれたる大がさゆ、せてひもときてあーだは  
きたり。あやしき様したる女にくろきかいねりさせ  
て、はふにと云ふものむらまげ化粧して、それもかき

赤所は着類也と見  
申其は顔不ぬる  
みて唇ふつくるこ  
しよし  
拍ほがさ これも  
同抄行旅具不登俗  
云大笠於保賀登笠  
有柄也とあり繪を  
見合まじし  
あしご これも同  
抄履襪具は履和名  
阿師太とあり  
かいねり 助元智  
秘抄に操練ハ裏ハ  
たが紅の打ちふる  
はて中倍もなきあ  
りと又えさり  
もふに 和名抄容  
飾具不自抄俗云波  
布逢とあり  
でんぐく 一種の  
鼓の名おて下ふ田  
つゞみとあるも  
是也とさいらハ竹

さ、せてあしだけらせたり。又でむがくといひてあ  
やしき様なるつゞみこしにゆひつけて、笛ふき佐々  
良といふ物つきさまぐの舞してあやしの男ども歌  
うたひ心ちふげにほこりて十人をうりあり。そが中  
にこの田つゞみといふものハ、れいの鼓にも似ぬ音  
して、ごぼぐとぞならしゆくめる。またうものし給  
ふ殿をらハびんぐしのすのこにて見給ふ。わかき君  
達四位五位などは高欄お招りうりて、見けうじ給  
ふ。又いと大きかるをけ折櫃どもに、これらぐくひ物  
どもなるべし。もてつゞきたり。さまぐふにめづら志  
きものどもをのともてつゞけたれ、びいさじう  
らんづらしうゆらんむぎていきつとびて今ハう

を細く入りこるお  
てまうりて音を出す  
ものなりこれらも  
繪おかけり見るべ  
し  
たご 田植あまの  
者どもなり下ある  
田人もおあじ

急の、志るを御覧どやるもいとをうりうねぼしめ  
さる。ありつる樂の者ども、乃の程つ、まうげお思  
ひたりつる、かしろにてハ我がま、ふの、志りあそ  
むかかでたるさまどもぞいみじうをうしくゆらん  
ぜらまける。折しもこそあま。雨まこしうちありて、た  
ごの袂ども、志ほどけぐなり。いつのほどにかき、  
あつまりけん。世人かざしらずふみたちて、見ざるかは  
どもさまへぞをうしうゆらんぜらまける。この田人ど  
ものうたふ歌をきこしめせば、  
さみだれにもすそぬらして植うる田を、君がちと  
せのみまぐさにせん。又聞しめせば、  
植うるよりうずも志られむ大そらをぐらにぞつ



あでのたをき 時  
もの一名と心ほべ  
し伴信友の考説あ  
れど長ければ略せ

まんみま草のいね、とうたふ歌さへつくりいでたれ  
む、みまやつりさの心ばへを、殿ばらいみじうけうぜ  
させ給ふ。よみ人たれとあらむほと、ぎすのなまきわ  
たるを女房、

早苗植うる折にしもなくほと、ぎすあでのたを  
さとうべもいひけり。又たれふり。

ほと、ぎすくもるなるねふきこゆれど、志ぼりも  
あへどたごのたもと、い、たごをいひける。ことほて、  
みまやのつゝさめして、あまへよていみじうけうぜ  
させ給ひて、ものかつけさせ給ひけり。かやうよ思し  
のこまふあく、御心をやらせ給ふ。けうある御ありさ  
まどもたまり。

御賀

治安三年十月十三日殿のうへの御賀なり。土御門殿  
の賀のまをむねと  
かけるふより然る  
つく

治安三年十月十三日殿のうへの御賀なり。土御門殿  
の賀のまをむねと  
かけるふより然る  
つく

治安三年十月十三日殿のうへの御賀なり。土御門殿  
を日ごろいみじうつくりが、せ給へれば、常より  
も見どころあり。ねもしろきりぎりなまじ。春秋の花  
のほひ、そのさうりならねど、所々の前裁の草霜が  
れ、山のもみぢ色をつくしたるもことさらめきわざ  
とつくりたてさせたまへらんやうに見えたり。庭の  
まふごなど、外のにハ似せ見ゆ。その目ふ成りぬれ  
バ、大宮<sup>上東</sup>うんのとのハやぐてねはします。日のうら、  
りにさしいでたる程に、皇太后<sup>姁子</sup>宮わたらせ給ふ。御輿  
とあれど、一品<sup>陽明門院</sup>宮のたてまつらぬが、あしけま唐の  
御車にてわたらせ給ふ。あそころたをまつりて、五

宮の山同来なりと  
 ざればじざと車  
 ふめたるこ  
 五の四方云々 皇  
 太后の同じ車云々  
 陪乗せしなり  
 浦のたまゆふ 万  
 葉集四ノ神本朝  
 及人磨  
 三ノまの浦の  
 濱ゆふも、たま  
 心ハ抑も、どた  
 ふあふぬらもよ  
 めるふよれり  
 三ノ 大宮上東門  
 院彰子と皇太后宮  
 研子と中宮威子と  
 の両方々をいふ

の御為光女りたつううまつらせ給へり。女房の車はほくら  
 び。十五ばうりぞある。袖ぐちきぬのりさなりたるほ  
 ど、うらのはまゆふにやあらん。いくへとちりがたし。  
 かくてわたらせ給ひぬる程に、さしつゞき中宮威子わと  
 らせたまふ。それハ御輿みこしより、ちりういでさせ給ふ。  
 御みこしともの女房車さきの車のぐらし。たまへたちのれ  
 はしますところと寢殿のの中に、おのくゆ座よそひ  
 て御志とねまありつゝ、三宮陽明門院一品宮権子かんののたはし  
 まれ。つぎふ又すこしひきのけ倫子てうへの御れらよそ  
 ひたり。御装束つかうまつる殿上人宮人みつるあり  
 さまを思ひまるらするに、れはしましてあみあさせ  
 給へらむ御ありさまきこえさせむかたあく思ひや

るふめでたし。うへの御方の女房さあぐハ宮の女房  
 におとらぬさまの装束をうへのたまへたどがまか  
 たはらいたく覚しめすふけふいとろえうけばり  
 さうぞきたるも、ことわりふみえてをりし。大みやの  
 女房ハ寢殿の南おもて西のわた殿うけてうちいで  
 たり。皇太后宮のハ、西の對のひんがしおもて也。どの  
 のうへのゆかハ志んでんのひんがしおもて、中宮威子  
 の御かハ東のたいのふおもて、かむの殿の御方  
 の女房東の對にしみあみりけて、うちいた志たり。御  
 かハぐの女房のこほれいでたるなりども、千とせの  
 まがきの菊どもをにほはし、よもの山のもみぢの錦  
 をたちかさねすべたまねぶきほもあらず。いろく

源氏物語抄

の織物小しき唐綾などすべて色をかへ手を盡した  
り袖ぐちひいゑろがねてぐねのおきくちぬひものら  
てんを志さる御几帳どもいろくさまぶななりこの宮  
あの宮れあじ色ひとつさまよもあらずまてえさせ  
阿はせ給へらんやうに見えそさまうはりいみじう  
めでたし志きしまやこのことい見えそまも  
ろこしなどによとまぞ見えけるとの有様中島  
あどの大木みややけにしのちいといこよふけれど  
もいまれひいでう急させ給へる木ども前裁あど  
い今すこいれひゆくす急たのもいげに見えたり此  
頃いなつかういまめうしくをうしき事四尺の屏  
風の急めきたりそれだよためうちつねのりなど

志きしまや 磯城  
あて元承大和國の  
地名あり欽明天皇  
奠都の地なるがそ  
れやがて日本國の  
枕詞となりしあり  
下なることハ此  
國といふあり

かきたらむハこたいなるべし弘高よりすけなごが  
うきたらんハなやありぬどころありぬべしこれハ  
いみトうこそあまめかうきをうけき所々の草前  
裁うちしもがれていかにぞやあるにひともと菊む  
らぎくあどのあるハ盛りにあるハうつろひたる又  
はなのなきほどなればにやけふいといとあいしさ  
まさりぬべし水々の紅葉も折しもめでたきにこど  
りのまつにつたのもみちのめでたうかうりたるよ  
まゆみのえもいはずてりておしはりいでたるも今  
まこし近うて見えまほいげなり庭はをるごとくして  
しだてのすなごなどのやうにきらめきて見えたり  
どころぐのあげばりへいまんあどの色けざやかよ

あげばり 和名抄  
屏障具五恒和名阿



計波初六帳也とい  
りていまも同  
小帳曰斗俗云斗  
帳一云屏幔とある  
是なり

こんめいの池の水  
云々 白氏文集卷  
三新樂府云昆明春  
水滿とあり

ちりかゝるをや  
古今和歌集上巻伊勢  
年をへて花のか  
がみとなる水はち  
りかゝるをやくも  
るといふらむ

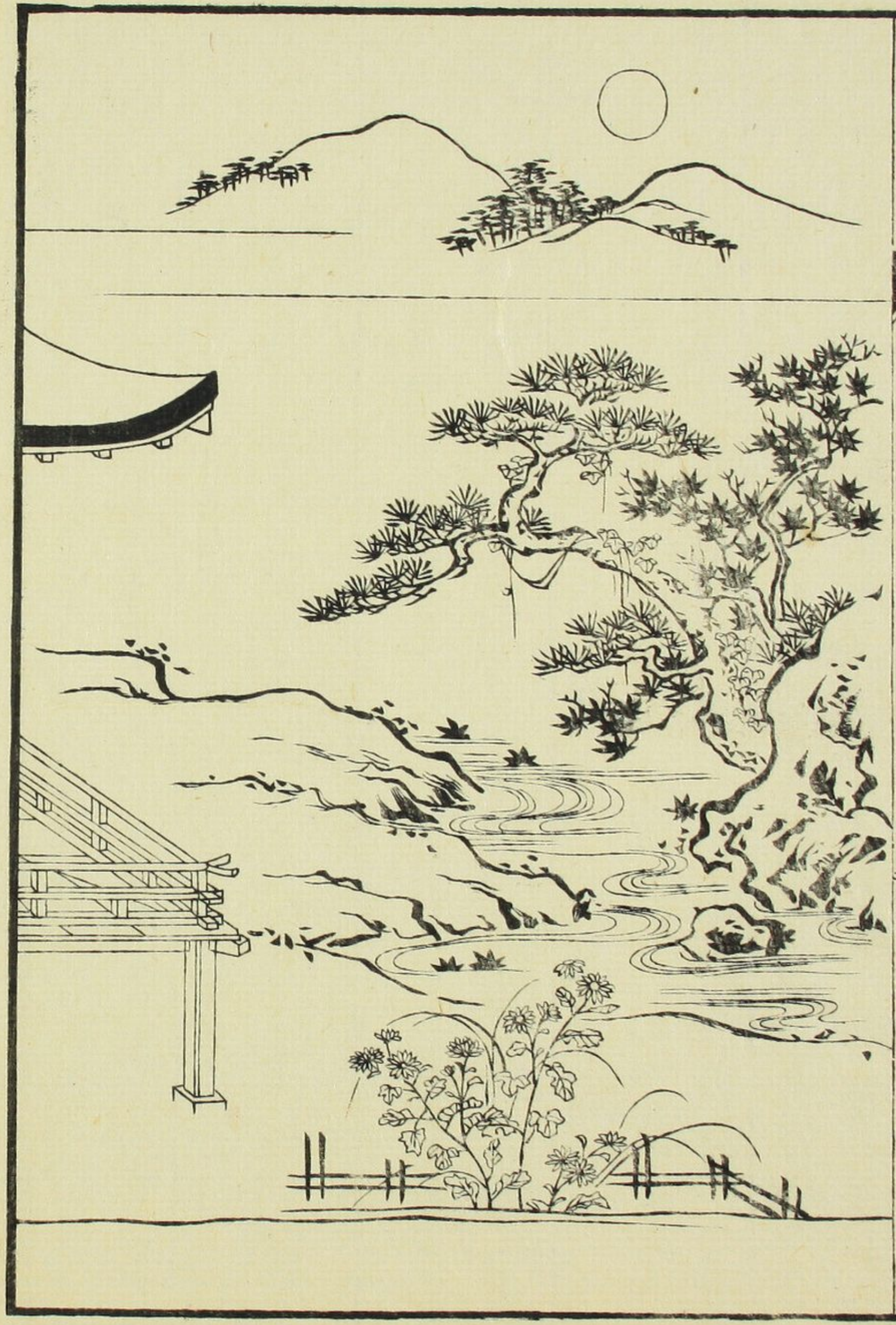
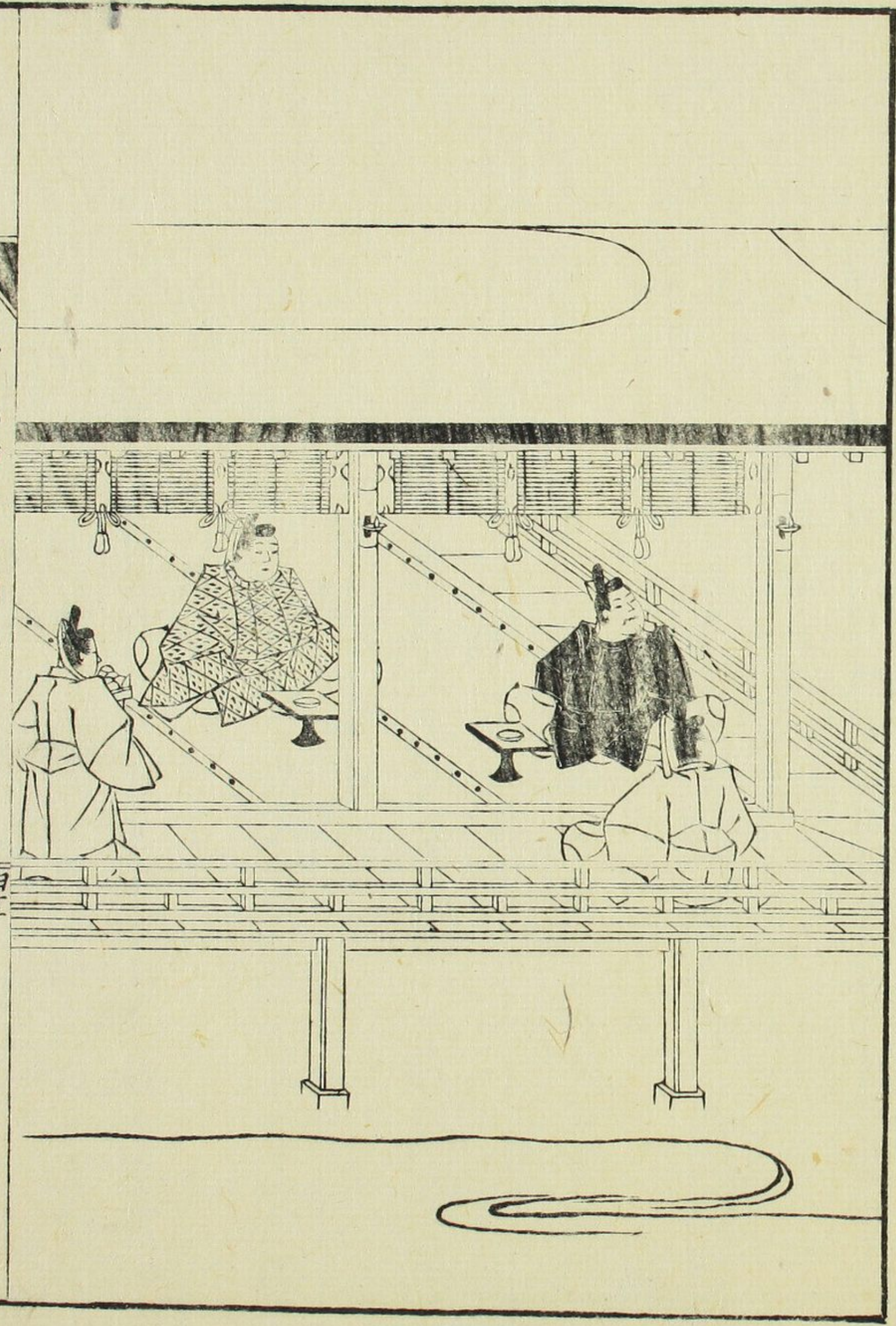
おさむりひろき  
拾遺集秋法橋觀  
私  
さぶらみふ秋の  
山べきうつてハ  
はさたりひろき錦  
とぞいふ  
ころがの水の云々

つたのいろのいとねどろくしきまであううみえた  
る程をどげだかうめでたし。人々のいそがしきけは  
ひの風にきゞのもみぢのすこしちりて御前の池に  
うかびあがれたるもかのこんめいの池の水の春秋  
のいろのなぐれりるらんもかくやと見えたり。伊  
勢がちりかゝるをやくもるといふらんとよみたり  
けんもればえはたばりひろきにきと觀教法橋の  
よみたりけんあどほまづ思ひよそへられける。れ  
まへちかきやりぬい清くすゞしくすゞてわうがの  
水のもみはじめたるにやと行末をるりに見えたり。  
よろづのろ六十せさせ給へるに僧も六十人をえら  
びめしたり。御屏風の歌あたらしうよませ給はずふ

壬子年拾遺記  
黄河十年一清云々  
すべて是れらの河  
あられり

はしらまつてま  
こしふ云々 此文

るき賀の歌どもをかゝせ給ふに侍従大納言いみじ  
うかき給へらんもすゞるに急ましう思やらる。かく  
てことはトまりぬまゝ僧綱ハ寢殿の南れひさし凡  
僧ハひんがしの渡どのにさぶらふ。さまあぐのこと  
もあるべき限りにてふねの樂龍頭げきす漕ぎいで  
たり。此世のろとも見えす。いみじうめでたし。ろども  
はつるきハに萬歳樂家の子の君達舞人にて四人ま  
ひ給ふ。  
やうく夜ぬいるほどに上達部みあそこの箏子にてあ  
そびたまふ。ひろの樂よりもこれハねもろきろ限  
りなし。月もさくいで、はるうに見やらるに、ところ  
どころのはしらまつてまごごとほともあそぶるなど



ハ流布本繪入本古  
本とも小冊小星  
り按むるは若枝の  
巻ふ所くの在れど  
ものまづてことふ  
ごもしたるをりど  
も云々とあるは、  
と文勢相似たりて  
まゝまゝといづき  
り顛倒せるならむ  
今流布本のまゝふ  
うつしおく  
盃のひりり 酒杯  
み月をかけたる

いみじうあうきにもた殿原の御かはらけもあまた  
たびふたりて盃のひりりもさやかにみゆる程に、公任  
條大納言、

よろづふとけふぞきこえん。うたぐに、みやまの松  
の勢をあはせて、道長との、御前

ありなれし契もたえて今さらには、こゝろけぐに  
ちよといふらん。實資小野宮右大臣、

ひな鶴のわりある山をみつる哉。これやちとせの  
ためしなるらん。頼通関白左大臣、

君がためちよやへかさねきくの花、ゆくす急遠く  
けふこそいえれ。教通内大臣、

うぞふればまだけ末ぞはるかある。ちよをかぎれ

る君がよはひい、齊信中宮大夫、

枝志げみかたぐいのる千代なれば、常盤の松もい  
とゞのどけく、侍従大納言、行成

免づらゝきけふのまどるい君がため、千代にやち  
ふにたゞかくゝこそ。頼宗春宮大夫、

紫の雲の中よりさゝいづる月のひりりぞのどけ  
かりける。能信中宮權大夫、

けふこそこのり久しきよろづ代の、敷しりそむ  
るはトめなりけき。これよりしもい夜ふけぬきバと  
どめつ。上達部の御祿のありさまふどくらけきバみ  
えねど、やそれ夜のにゝきよやとまでなん。かをりを  
かくれなきわざなるまゝ、えもいはず志みかへりたり。

今ハ宮々かへらせ給ふ御有様どもいとよそほしう  
あまりに見えさせ給ふ。いつも物のめでたきかりに  
も、さハこれを御賀といふにこそ有りけき。是をめで  
たきものゝためハいひかたるべし。

④後ぐみの大将

かくて内大臣殿公任女のうへ、ことし廿四をりりよや。此程  
に君達五六人をりり給へるを、又今年も唯も  
あらですぐさせ給へるが、けふあすにならせ給ひにた  
まはれいの小二條にこそは、すませ給へるにも、  
さとしなど人々の憂もささぐしう、またみづから  
も物にぼそくたばされて、いうにとあはれにのみれ  
ぼしみだるゝに、わたらせ給ふとも、またゝをみ

後悔大将 此巻を  
かく名つけしハ教  
通大物の室産後の  
惱み苦しうぞし時  
小松の信如の灵不  
はうられて加持と  
とどめたる小やが  
て失せられハ大物  
後悔せしるあるふ  
ふれり  
君達五六人 その  
ご、信家信基信長  
静寛の四人女君生  
子觀子の二人あり  
き

んとすらんやと、うちかりせ給ふもゆゝし。此まへ  
なるひしとぐハ、たそろしう思ひきこえさせと  
り、殿の人々ハさらなり。よそお人もの此あり  
さまをゆめかどに見つゝ、きこえさすまは、大納言ど  
のあまうへ公任室なご、志づこころなくたばさるゝふ、わ  
たらせたまひぬま、いとゞ此修法御續經さま  
がまよろづせさせ給ふ。のねてよりも、ことし本年  
ハ、かやうなる由ありさまあらば、うぎりなりと  
のみねがしたるに、たのもしげあくのま、たがし見  
たてまつらせ給へど、志はすのつごもりばうりに  
いとたひらかりてを、とこ君生れたまひぬ。此こゝ  
ちたがどもなこのくれいより、いとさはやりに

あまうへ 昭平親  
王の女ふて居るの  
ま女とたう公任ふ  
嫁しとわく尼ふお  
りし也

御湯ゆであどせさせ給へばたれも今ぞ心のどかに  
たぼしみたてまつらせ給ふ。わりぎみの御めのは  
かねより申しりば、ごせちのきみ、故参河の守方  
隆ぐむすめ、衛門のたいぶむねかたがめぞまゐりた  
る。御うぶやのさこがしきまぎれに、としもくれにけ  
り。ついたちなどのうらもたぼするなげなるに、教通殿の  
御ありきもなつりけき、こゝろのどかに君達の御  
いたゞき餅あどき、にくきまでいそひ聞えさせ給  
ふ。ついたち六日ハ七日の夜あきハ、めづらしげなき  
御りなれども、年のはじめとて、いんどき頃あれば、い  
とゞめでたし。けふハ七日にて、ゆゆどのあるべけき  
バ、又よさりのゆゆどの、うらもたぼなどさまぐの、し

いゞき餅 初花  
の巻お委しく注せ  
り

あくむせ給ひそ  
あくびをするま  
り吹吐とかく腦の  
作用にてかゝる病  
もあるなるべし

る程に、ふハりにうちあくむせ給ひて、御けしきいと  
くるしげなりけき、いとねそろしうて、さるべき僧  
たち、日比の御祈にうちたゆみ、こゝちよげあるに、俄  
にかくたはしませバ、皆参りあつまりて、加持まゐる。  
殿のうちの僧ハ、さるものふて、ほらのさるべき残り  
なくめしあつめて、かぢまゐりたる聲ども、のゝ志  
りみちたり。すべてあさましうくるしげなる御心ち  
に、志づ心なき人々たほかり。御ものゝけ人々にうつ  
しのゝしる。されどはかぐしきこといはず。左大弁定  
頼のきこ、犬内記義のりた忠などよびよせていふらうど  
もあれども、物のけのいふことなれば、たきもそれを  
まことゝたぼすべからぬを、貴布祢のたはするとして、

小松の僧都云々  
勝算といへるもの  
の死をなう

かきひたし 茶の  
類ふや或ハ落符と  
いふものをけける  
餘りのけみや詳お  
らば探尋ぬし

いみじうたそろしき事どもあれど、さりともたつたに  
ぼす程に、此殿にハ、小松の僧都の靈のはじめハ此  
うぶやあどのおハ、いとたそろしかりしかど、それを  
よろづにいひのまゝにせさせ給ひし程に、いみじき  
御とくいにありて、それぞこの年ごろあにりもいと  
よくつげきこえさせつるも、それらもおとなきを、ど  
のハあやしくたぼつらなくたぼしめす程に、御ゆま  
ゐらんとあれバ、もてまゐりたりけるをきこしめし  
て、やうて物もの給はせずからせ給ひぬ。かきひたし  
の志るをも、の葉につけてまゐらすれど、すべて御  
くちもふさがせ給ひてすぢかけきバ、心誓僧都まゐ  
りて、たさへて加持まゐり給ふに、志をしありて御口

うごかせ給へバ、御ゆなど露ばうりまゐらす。ゆハさ  
もなきに、御みづからもの、けたぐいできにいでく  
れバ、いとかたはらいたしとたがしめし、なほ人に  
うつさばやとの給はすれば、そらの僧心をあはせ  
ての、志り加持まゐりて、こと人ふうつせど、猶御心  
ち同ドやうなまじバ、あつまりてかち参る程、れいも  
つきからひたる女房に、小松の僧都あらはれて、この  
加持とめよ。あふかしくあやまつた。たゞひき聲を  
よめくといへバ、殿此もの、けのかくいふに、あるや  
うあらん。この加持とめて経なれくとの給をす。か  
くいふハ正月五日なり。殿いみじう制せさせたまへ  
バ、加持とめてそらの僧ひきごゑをよむたり。そ

の程のれどろぐしきハ、おしはかるべし。心養僧都も  
たきも所もの、けのたへがたげたりつるものを、た  
どれおじり加持をまゐらでとくちをしうたも、おほ  
どに、さこそその、ありしうど、やがて絶えいらせ給  
ひぬ。あさましくゆゝしなども世のつねあり。よろづ  
のものハ、此二三日のほどの御あり様に、のこりなく  
なさせ給へるに、まだぐいみじうせさせ給へどかひ  
もかし。さべき僧たち皆まうで、良海内供ばかりぞ  
とまりてさぶらふ。うへの所をらうらの内供の君日  
比御まくらがみにてはかなき御くだ物まゐらせ給  
ふ。たきふしも、よろづぶつからまうり給へるなども  
すべていとあさましくきりあり。尼上つといだき奉り

うへの所をらうらの  
の云々 公任の三  
男入園法師のふと  
云ふ内供とい内供  
奉十禅師と略せる  
ふて僧の官名あり

給ひてふさせ給へり。御むねがちに乳おどもつとは  
りて、いみじうあはれにみえさせ給ふ。いとあやしう、  
所々ありまなどして、うたてげにたはします。ハ、よの  
人のありさまにて、うせさせ給ぬるにやハあらんと、  
あそれゆゝしうたばすにつけても、殿も大納言殿  
も、えみたてまつらせ給えず。いとあさましく聲ども  
さゝげての、ありありせ給ふもいゝじきに御生子くし  
げ殿ハ十一あり。姫君ハ九ばうり、たゞこの二ところ  
物の心あらせ給へるさまに、いひつゞけおき給ふ。こ  
と君たちハ、あそびいさかひなどせさせ給ふ。あはれ  
に心うし。この日ごろかわりいゝどかりつるに、夢  
みいひれかせ給ふ。あかりつ。たほったもの、をいは

せたてまつらぬ御もの、けなりけり。あさましう心  
うく、いみじき僧都勝筆の靈にはからせ給ひぬる。されど  
それさべきにもあらずとねがすにも、ゆくかたかき  
御心ちどもたなり。猶いとねぼつうかくわびし。のたま  
はんをきもきかん。また神のまことそらごとをき  
かんとて、左近のめのとかくくゆくちよせにいでた  
つに、尼上もふ不我もゆるむも、昔の御けしきも見  
えんに對面せず。いとこぼるうかるべしとて、志の  
びてももの給ふ。年頃むつまじうねぼしめす女房一  
人そへてねはしまし、尼上には此人々のきぬのす  
そをひきうけて、ねはするやうにもあらずもてな  
て、かうかぎをば御車のくちのかさのせたり。いろ

くちよせ 死者の  
魂を招きよせて其  
いそんやうをやく  
こざなり

かうかぎ 巫の守  
をかくかんかぎの

昔便ありみこも  
いひて神おつかう  
る女をいふ

なることにかと心もとかき程に、このかうかぎたゞ  
かきにかきて、うへこそや。なごかくれ給ふぞといひ  
て、車の志りのかたに、只よりにふりて、あはれいかゞ  
し給はんずる。えつううまつらでや、侍りぬること、  
かあらば志ぬべき道理もあうりけむぞ、かくありに  
しうバ、衰に心うくこそハ、あどいひつゞけかかせた  
まへどば、ゆくしきもあし。左近のめのとにハ、むね  
をかきあけて、ちのまんとの給へバ、めのと、志り給  
へると見るにあん。なほあさましき物にこそありけ  
れと、あはれふかあしういみじうて、かくかへらせ  
給ふ。それもあしや。この物のけのさばうりありし折  
きこえけるやなど、いまぞねぼしあはせて、心うくあ



やうしておん  
れはまじなひの  
と兄ゆれが禁厭の  
厭の音うさるはえ  
ふの假字なり

さましうたげさる。かくて二三日ある程ふ前相摸守  
たりふしといふ人まゐりて、ゆめ詞にみえ給へる事こ  
そさぶらひつきなき此御有様ハ、ひとのつかまつり  
たることにこそあべけ也。御帳のたまひの下あどを  
御覧ぜハ、やうし志ておんおきたるとみえはべる也。  
まことふやうし候はばまこと、こそハ志らせたま  
はめと申せば、いとむつまじう覺しめす人々いきて  
見るふまことにありける。さは夢ふもみゆるものか  
りなり。あさましう心うくいみじともねろり也。殿と  
尼室上うちかたらひ給ひつ、うちあきくすぐさせ給  
ふ。殿敬通の御身のならん様も志らず、おきまどをせ給へ  
ば、藏の命婦道長まゐりて御堂の御消息上倫子の御ことやふ

傳ど、北の方  
傳殿ハ大納言道綱  
なり北の方ハ権佐  
の女倫子の妹中君  
をいふ

後くやしき大納言  
云 卷の名こ、の  
初みうれり  
一品宮 一條天皇  
第一の皇女ハ母皇  
后定子おおしま  
す

ろづに聞えおぐさむれど、才のあらばこそとのみた  
ぼし、まどふふ御物のけなどの事も傳のとの、北の  
方の志わざといひて、貴布ねのあらはれおどし、い  
まさへさやうにいふも、かたはらいたくたげさるれ  
ばげに此頃ぞ後くやしき大将とも聞えつべし。  
かゝる程に、一條院の修子一品宮、年ごろいみじう存ふ  
のくたはしまし、御ざえなどはいさしうし御すぢ  
にてたはしませばよや。一切經よませ給ひ法文ども  
御覧で、いさゝり女とも覺えさせ給はぬ御ありさ  
まなるに、尼にてたはしまさんも、かばかりの御行ひ  
にこそハあらめなどたげしなぐらなほあいなき事  
なり。おふりにさはるべきぞなどたげしめしけるよ

三月小儀小ならせ  
給ひぬ云々 小右  
記号嘉元年三月  
四日の条に一品官  
修子母餘日有被賜  
而去夕儀被出家若  
是御本意歎云々と  
又云う此時御年  
廿九ふらせ給へ  
り

や。三月万壽元年に俄にならせ給ひぬ。この宮のうちハさらふ  
り大宮内上東春宮まできこしめして、あはきに覺しめし  
聞えさせ給ふ。さるハこの正月に、大上東之の京極殿ふ  
れはしまし、後一条ふ行幸ありしに、修子みやもそこよわたら  
せ給ひ、御對面ありしに、いみじうあはきに物を覺  
しあるさまの御物がたりなどありて、今よりハ内ふ  
たはしますべくきこえさせ給ひて、年ごろのたぼつ  
らふさを悔しうたもひ聞えさせ給ふに、かゝる御事  
をきこしめして、あはれにくちをうたぼしめす。道長  
の、西あいにそぎまるらせ給ひて、よろづ衰なること  
かへむぐきこえさせ給ふ。故院一条もかやうにてぞたは  
しまさんものとぞたぼしめしたりしかし。よはひ久

帥中納言 隆家  
定子皇后の弟として  
修子内親王の叔  
父ふあたる

しとしてもいくばく侍るべきわざあらず。今ハたゞ佛  
ふたらせ給ふべきあり。現世後生めでたくおはしま  
まも也。波斯匿王のむすめ心をねこせる、人もをしへ  
び髪をそぎしに、たれかハ教へす、めし。ありがたく  
むうしのみたぼえたる、心おきてなり。よに侍る人  
ハ、よろづにつけてつみをあむつくり侍る。まして子  
など侍らば、いとこそ物たもひわざお侍りけし。女房  
遠まめふふくつかうまつり給へ、あどあはれふこ  
まやかにきこえさせ給ひて、出させ給ひぬ。帥中納言  
ハ、どのくたほせらるるも、制し申まへきにもはべら  
ぬに、心うくえあり侍らで、いみじうなき給ふ。大宮  
ふりも殿より、ゆさうぞくたてまつらせ給ふ。宮よ

中姫君 賴宗の女  
を修子内親王の  
養女ふ志給へる事

り東宮大夫どの、中姫君<sup>延子</sup>まだをさなくおはせしお  
より、とりはなち養ひ奉らせ給ひにける程に、ことし  
八九バウリにぞならせ給ひふける。この殿の御有様  
を、いみじうくちをしう心ぼそくおぼしめしたり。そ  
れふ志さぶひく太夫殿のおげか、うらおぼすべし。か  
くて山の座主院探めして御戒うけさせ給へんとて、  
其御よういあり。お志つらひなど、もとの様なれば、お  
し返しさるべきさまの、おぐとも宮司いそぎつかう  
まつる。お帳よりはじめあらためさせ給ふ。一條院よ  
ろづにし奉らせ給へりし、たまたの御調度共も、皆この  
姫君<sup>延子</sup>の御れうふと取りをさめさせ給ふ。大宮も、いり  
でとらほしいそがせ給ふ。みちの、おるふまき、さやう

にておはしまさんお、同じ心よておぼつかあから  
ず、おぼしきこえさせ給ひける。よあまほしき御  
ありさまにておはしませば、さるべき人々なども、皆  
心ざり参るべきさまになん侍る。さるハ御年なども  
まだいと若くおはしましけきども、げにおあしくは  
とばかり、行す急をかねて覚しめすこと、おはきにめ  
でたくおんとぞ。

③鳥のまひ

かくて御堂のひんがし、北南さまよてに、むきふ  
十餘間のかはらぶきの御堂たてさせ給ひく、年ごろ  
つくりみが、せ給ひつる。おほとけ、南どのよりわた  
し奉らせ給ふ。萬壽元年三月廿五日の、りなり。やがて

もの舞 興巻ふ  
茅師堂櫻養の物語  
階の左の、そのま  
り、こら、まの、まの  
まひ、あくるほど、云  
云といふ文あるに  
よれり

大原入彦の君俗名時通左大臣雅信の弟小寛和二年四月出家せり此人のまかりたるは又按ずるに系圖ふに二男時叙大原小位と見えたり

それ小御堂供養とればしめしけきど<sup>倫子</sup>うへの御はらうらの大原の入彦のきみの、二月にうせ給ひにしらば、うへの御れもひにたはしませば、供養ハ六月ふとさだめさせ給へり。佛のわたらせ給ふその日になりて、春の霞もたちけり。紫の雲すぢをた、むたふびきけり。日うら、か又照りたり。くもりなき辰の時むりりに、わたしたてまつらせ給ふ。丈六の七佛薬師皆金色にたはします。日光月光みなたち給へるはすぢたどもなり。六観音たふとく丈六にてたはします。佛を見たてまつれば、獅子の山座より山ぞのこぼれいで給へるほどいとじくたまめか、く見えさせ給ふ。わたらせ給ふ程ハ、力車といふ物をふたつあらべて、一

卅二相八十種好相人相のま好相好の好なり委しくハ諸乘法教ふるえたれと繁れば、省く佛ハこれと皆がら具備せしかり六道 地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六をいふ  
六観音 千手心観音馬頭士面准提如意輪の六をいふ由これも諸乘法教小兄ゆされと家一ハ大慈大結所子

佛をたはしまさせ給ふ。けふハその車のうへにたはきかる蓮花の座つくらせ給ひ、たはしまさせ給ふ。あふげバ寶蓋そらにあり此蓮花座一々の色にたがひて、千の光明か、やけり。佛此座のうへにたはま、して、卅二相八十種好あらたにて、大定智慧の相現じ、威光あしたの日のごとし、普賢色身無邊に、六道自在無量にして、體相神徳魏々たり。鳥懸みどりこまやかに、慈怒の山まなこはちすの、ごとくひらけたり。薬の壺まろのねにて、みおもたせ給へり。又六観音金色の相好圓滿し、玉珠月輪相現し、無数の光明か、やきて、十方界に、んまんを、所有の色にハあまねく一切衆生を利やくせんと覺したり。たふじく色々の蓮

無畏大光普照天人  
丈夫大梵深遠の六  
と本出少も此方  
かなり  
三昧 ことに擇し  
てハ愛とも愛  
ともいふ  
大悲云々大梵深遠  
とも小六観音の  
うちの名なり上の  
注をえ全とくし  
かうろ 和名抄傍  
坊具小香爐小品極  
云以白銀香炉里沈  
水供養般若とあり  
簫笛云々 簫ハ和  
名抄管簫類に和名  
世宇乃布江其形奏  
差象鳳翼也云々  
凡え笙聖候ハ同抄琴  
瑟類に百済國琴也  
和名久太良古止云  
云とえ鏡ハ鐘鼓  
類に鉦一名鏡金鼓

花を座にせさせ給へり。大悲をけじめとして、大梵深  
遠にいたるまで、つゞき居させたまへり。御車につき  
つうろまつるものどもかしら小蓮花のかうぶりし  
ありききぬを着たり。佛の前後左右にハ、諸僧威儀具  
足して、おねうしたてまつれり。もろくのたからのか  
うろにハ、無價の香をたきて、もろもろの世尊小供養  
志たてまつる。がくのこゑ簫笛琴篋篋琵琶鏡銅鈸を  
志らべあはせたり。井のすぐたにて舞ひつゞきて、佛  
の安祥とよそほしくあゆませ給ふに志たがひく諸  
僧梵音錫杖のこゑをとあへて、讚を誦してわたる。空  
より色々のたからの花ありて、こゑく天の樂を供養  
し、ほとけの功德を歌詠す。このにはハ参りあひたる

也云々とえ銅鈸  
も同抄子銅鈸子出  
自西域無柄以皮爲  
紐相擊以應節今夷  
衆多用之とえ云々  
錫杖 和名抄傍坊  
具小錫杖亦名智杖  
彭頭聖智也亦名徳  
杖行功徳本故也と  
あり

孔雀鸚鵡 この下  
一本にかれふびん  
がとあり

人々たがろげのくどくの身とたほゆすぎにしもい  
まゆくすゑもげふの佛ふあひたてまつらざるなりぬ  
る人前佛後佛の衆生のこゝちす。いみじうくちをし。  
殿の御まへ我の志はざともたほえさせ給はず。なみ  
だハ雨とふらせ給へども、そらハ曇らず。上達部の歡  
喜の御袖も志ほどけぐなり。東ハ經藏みやの女房西  
ハ鐘樓わさりまで宮々の女房車ども、三四づゝのり  
こぼれみだれいでたり。やなぎさくら藤山吹こき  
まぜをのし。これを其かたにをりしくめでたし。佛  
やうくたをしましよるほどに、御階の左右のそばよ  
り童部の鳥の舞志たる程まことの孔雀鸚鵡鳥雁鴛  
鴦のあそびなれたると見えたり。

かくて五月万壽元年にもなりぬれば、傍の殿の卅溝とていそ  
がせ給ふ。五月五日わらはべのくす玉つけたるを以  
らんじて、内教通大臣どの、御生子くしげどの、

年ごとのあやめの草ふひきかへて、なみだのかゝ  
るわが袂あふ。をつなくすぎて六月にもなりぬきバ、  
廿六日かの薬師堂の供養、れいのみどもえもいはず  
めでたし。御堂の御ありさま、傍の目もかゞやきて、い  
りにもみわきがたし。大東宮との、倫子うへとぞ、おはしま  
す御つぼね、この御堂の北のうらにふりて、ひさしふ  
みかみまかけたり。御堂のつくりざま、犬防のさまか  
ど、いしの御堂にことふらず。やくし佛のたまへのの  
たのもやの柱にハ、十二大願の心を繪にかゝせたま

十二大願 薬師淨  
瑠璃光如来本願功

徳經ふええたるは  
文もくれば引さす  
飯室のあざり 延  
園の義懐の子にて  
此の書を善くする  
すえありき

十二神将 官毗羅  
大船以下十一神を  
云ふ釋迦より以前  
天竺ありし神の  
名を委くハ本經  
功徳經ふええしり  
ど今省く

一聞我名云々 右  
同經に我之名号一  
經其耳衆病悉除  
心安樂家属眞具  
皆豊足乃至證得无  
上菩提と見えたり  
七佛藥師經云  
ハ云々 本文云

へり。六觀音のたまへのかとのは一らふハ、觀音品の  
偈のこゝろをまなか、せ給へり。飯室のあ延ざりの手  
をつくし給へるほど思ひやるべし。南より北さまに、  
七佛藥師ならばせ給へり。をしぐに日光月光たちた  
まへり。ひまくに十二神將たけ七尺ばうりふて、色々  
のきぬをききまぐの顔こゝろぐのけしきにて、もた  
るもの皆こゝろかり見るふかつハ急ましうかつハ  
れそろしげあり。一々にみたてまつりて、隨願やくし  
經の文を思ひいでたてまつる。一聞我名惡病除愈乃  
至速證無上菩提とあり。一たび御名をきゝてだにか  
あり。いはんや七佛をきたてまつらんほど、思ひやる  
べし。又七佛藥師經にいはく。もしわが名をきくすあ

七佛系師經とあれどそこの作者の思ひたがへ不あらずや本願功徳短し若得聞此藥師淨瑠璃光如來名号使捨惡行修善法不墮惡趣沒有不能捨諸惡行修善法隨惡趣者以彼如來本願威力令其現前暫聞名号後彼命終還生人趣云々漸修修行諸善陸行速得圓滿とあるぞこゝ不ハ能くかなふべき

らんもの、惡趣にれちバ、佛の神力をもて、又名號をきらしめて、返て人趣にむまれて、井のきやうを修し、すみやりに圓滿するをえしめんとのたまへり。まいて見たてまつるほどを思ふに、ちろかあらんやハ。又六觀音ハ六道のためにとればしめしたり。本誓をたもふにいとあはれなり。

標  
榮花物語抄卷四終

